

日本応用心理学会令和元年度公開シンポジウム

妖怪と心理学 私たちが得たもの 失ったもの

日 時：2019年11月30日（土） 13：30～16：00

場 所：東洋大学 白山キャンパス

企 画：日本応用心理学会企画委員会

共 催：（社）社会行動研究会

挨 拶：竹村牧男（東洋大学学長）

話題提供：軽部幸浩（日本体育大学）

高橋綾子（東洋大学）

飯倉義之（國學院大学）

指定討論：吉川肇子（慶應義塾大学）

司 会：桐生正幸（東洋大学，（社）社会行動研究会）

■はじめに

桐生：それでは時間となりましたので、早速ですが、日本応用心理学会公開シンポジウム2019「妖怪と心理学 私たちが得たもの 失ったもの」を開催したいと思います。まずは、日本応用心理学会の理事長であります藤田圭一先生からご挨拶をいただきたいと思います。藤田理事長、どうぞよろしくお願いいたします。

藤田：皆様、こんにちは。日本応用心理学会理事長を仰せつかっております、日本体育大学の藤田でございます。



本日は、一般ご参加の皆様、学生の皆様、本学会会員の皆様、ご多用の折に、東洋大学白山キャンパスへお運びくださいまして誠にありがとうございます。

私どもの日本応用心理学会は、わが国の心理学関係の学術団体のなかでも、日本心理学会と並んで古い歴史と伝統を誇っており、現在会員数は約1,200名でございます。

本学会は、心理学の応用を目的に、社会に開かれた、また社会に貢献できる有意義な学会であると自負しております。その一環といたしまして、毎年1回、この時期に「公開シンポジウム」を開催しております。そのときどきにふさわしいタイムリーなテーマをもって社会にアピールすることが、本学会の社会的な責務であると考えている次第でございます。

昨年度は、立正大学品川キャンパスにおいて、『自動運転が社会的に受け入れられるために』と題する公開シンポジウムを開催し、大勢の皆様に、ご参加いただきました。

本年は『妖怪と心理学 私たちが得たもの 失ったもの』というもので、わが国にとりましては、神秘的かつ大変魅力にあふれたテーマでございます。わたくしも会員の一人として、とても楽しみにしているところです。

このシンポジウムをご企画くださいました本学会

企画委員会委員でいらっしゃる東洋大学の桐生正幸先生、本学会企画委員会委員長の大阪大学の白井伸之介先生にお礼を申し上げます。また、本公開シンポジウムのために、会場をご提供くださいました東洋大学・竹村学長先生をはじめ、関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

なお、このシンポジウムは、東洋大学：社会行動研究会との共催でございます。研究会の諸先生に感謝申し上げます。

のちほど、桐生先生から、本日このシンポジウムにご登壇くださいます諸先生をご紹介くださるものと存じます。いずれの先生もわが国の学術研究の最前線でご活躍の先生でいらっしゃいますので、私たちを刺激してくださるお話をお聞かせいただけるものと楽しみにしております。皆様とご一緒に、私も勉強させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

簡単ではございますが、本学会理事長としてのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

桐生：藤田理事長、どうもありがとうございます。続きまして、本学東洋大学の学長でございます、竹村牧男先生よりご挨拶をいただきたいと思えます。竹村学長、どうぞよろしくお願いいたします。

竹村：皆さん、本日はご多用のところ、またお寒い中、本学にお運びいただきまして本当にありがとうございます。心より歓迎申し上げます。

このたび、日本応用心理学会公開シンポジウム2019「妖怪と心理学 私たちが得たもの 失ったもの」が、この東洋大学白山キャンパスにて開催され、皆様をお迎えすることができ、大変うれしく思っ

ております。

日本応用心理学会は、今、藤田理事長からのお話にもありましたように、わが国の心理学界の中でも大変長い歴史を持つ学会だと伺っております。そして、1972年から毎年開催されている公開シンポジウムでは、様々なテーマを取り上げ、研究者のみならず広く地域の皆様にもご参加いただいている催しとお聞きしております。

本日の公開シンポジウムでは、日本応用心理学会理事長・藤田圭一先生をはじめ、学会の皆様がご参加され、話題提供者であられる軽部幸浩先生、飯倉義之先生、指定討論者である吉川肇子先生により、妖怪と心理学について興味深いお話がなされるということで、会場の皆様にはさぞかし楽しみにしていらっしゃるかと存じます。

さてご存知のとおり、東洋大学の創立者であります井上円了は、教育者、哲学者として知られておりますが、仏教学研究で日本の論文博士の第一号となり、さらには倫理学、宗教学、教育学など、人文系のあらゆる学問分野で先駆的で高度な業績をあげました。のみならず、実は心理学研究においてもまさにその先駆けであったと言っても過言ではありません。

本学では、『井上円了選集』25巻を刊行しておりますが、その第9巻、第10巻が円了の心理学の業績を収めたものとなっております。両巻とも、かつて本学の教授であり、先年亡くなられた恩田彰先生が解説を書かれています。その第9巻の解説の冒頭には、次のようにあります。

「井上円了は哲学者としての名声は高いが、明治時代に心理学がわが国に導入されたときに、彼が心理学者として、早くから、しかもたくさんの先駆的な心理学の業績を出しており、しかも彼を有名にした妖怪学の重要な研究方法として、心理学を取り上げ、また心理学を単なる学問に終わらせず、日常生活に役立つことを念願として、応用心理学を講義し、その重要性を強調したことは、あまり知られていない。」

実際、円了は、明治20年1月に出版社、哲学書院を設立し、『哲学会雑誌』を創刊するとともに、その年の9月に心理学概論とも言ふべき、『心理摘要』という本を出版しております。この刊行は、かの元良勇次郎の著作に先立つものであることは間違いありません。

この年の9月16日に私立哲学館を創設しますが、



円了はその哲学館で応用心理学の講義を担当しました。その講義録には、「心理学(その応用ならびに妖怪学)」と題されています。

なお、ご参考までに、明治 35 年に刊行された『甬水論集』、甬水とは円了の号ですが、その論集には、要領良くまとまった「妖怪学と心理学の関係」という論文が収められております。ちなみに円了は、明治 27 年に『東洋心理学』、同 30 年に『仏教心理学』を著わし、唯識思想における心の精細な分析を心理学に応用するなどしていることも、今日再認識、再評価されるべきではないかと私は思っております。

さらに円了は、心理療法の重要性を強調し、また夢の分析研究にも力を入れました。森田療法を編み出した森田正馬は哲学館で円了の講義を受け、その心理療法の中の自然療法に大きな影響を受けて、その森田療法を開発したのであります。

このように円了は心理学を含むあらゆる人文学の分野に高度な業績をあげておりまして、私は日本文学の父と呼ぶべきであると思っています。とりわけ心理学を基盤として「妖怪学」を確立した、知と行動の巨人と呼ぶにふさわしい人物であります。

折しも今年は円了の没後 100 周年にあたりますが、この年に本学において公開シンポジウム「妖怪と心理学」を開催できますことは、私としても誠にうれしく思うところでございます。

このたび、本シンポジウムを企画された本学大学院社会学研究科の桐生正幸先生、その指導を受け、妖怪に関する心理学研究を続けている大学院博士後期課程の高橋綾子さんは、円了の建学の精神である「諸学の基礎は哲学にあり」を尊び、また会場にお集まりの皆様同様に、新たな応用心理学の領域を開拓し、社会の心の諸問題の解決および発展に貢献していくことを目指していると聞いております。

本日のこのシンポジウムにおいて、様々な「妖怪」現象の分析と解釈を通じ、ぜひ積極的に活発なご議論が展開されますことを、心よりご期待申し上げます。

最後に、本日お集まりの皆様を重ねて御礼申し上げますとともに、日本応用心理学会公開シンポジウムが実り多いものとなり、心理学の研究がより前に進まれますことをひとえに祈念申し上げます。

以上、甚だ簡単ではございますが主催の大学を代表してのご挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございます。

桐生：竹村学長、どうもありがとうございます。

では、早速ではございますが、本日の企画趣旨、及び話題提供の各先生をご紹介いたしたいと思います。

まず、本シンポジウムの企画でございます。

2015 年から日本心理学会の中で「妖怪心理学」という名称にて自主企画シンポジウムを開催させていただいております。その中で、そもそも「妖怪」というものはいるのか、いないのか、ということには言及せず、例えばサンタクロースのように、私たち日本人の心の中には「妖怪」がいて、その「妖怪」が何らかの機能や社会的役割を果たしていたのではないかと、といった観点から様々な方にご登壇いただいて、自主企画シンポジウムを続けているところでございます。

その流れをくみまして、本日は……。

あつ、すみません。申し遅れましたが、私、企画・司会の桐生でございます。どうも拍手ありがとうございます (笑)。

では、話題提供の各先生のご紹介でございます。トップバッターといたしまして、精神生理学がご専門でございます、日本体育大学の軽部幸浩先生です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

続きまして、日本で初の妖怪心理学を確立しようと奮闘しております、東洋大学大学院の高橋綾子先生、よろしくお願いいたします。

続きまして、民俗学の中ではもう非常に高名でございます。飯倉義之先生でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

本日は、お三人の先生からそれぞれの分野から妖怪についていろいろお話をさせていただくということになっております。

この話題提供を受けまして、指定討論者でございます慶應義塾大学・吉川肇子先生です。どうぞ、よろしくお願いいたします。吉川先生から鋭いご指摘等々を受けながら壇上にて、全員でご討議いただき、最後にフロアの皆様からご質問等をいただくという段取りになっています。

なお、本日の公開シンポジウムでございますが、後ろのほうにカメラを設置しております。可能な限り顔が映らないようにしておりますが、「どうしても私は映りたくない」というふうな方がいらっしゃれば、

ご連絡ください。

また、日本応用心理学会の機関誌に本日のシンポジウムの内容が記録されます。検索するとすぐ出てくる電子媒体に残りますので、ぜひご活発なご意見、ご質問等いただければと思っております。

では、早速ではございますが、トップバッターといたしまして軽部先生に話題提供をお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

■話題提供 1

軽部 幸浩（日本体育大学）

軽部：本日は公開シンポジウム「妖怪と心理学」につきまして、発表させていただきます。日本体育大学の軽部と申します。よろしくお願いします。

今、最初にご覧になられたのが Google の画像検索で、漢字で「妖怪」という 2 文字を検索して出た画像のサムネイル一覧を出しました。先ほど桐生先生から紹介いただきました。私、妖怪はビギナーなのでなるべくお手柔らかによろしくお願いします。

本日、軽部が話させていただきますのは、「不安の力」「人の顔に見える」「植物は気づいている」「五感で感じる妖怪」「河童ブギウギ」「顔をかえたら?」、この 6 つでございます。

まず、不安ですね。恐れと不安とあります。

恐れ (fear) ですね。「恐れは目の前の相手に対する直接的な防衛反応」と心理学のほうでは定義されています。不安 (anxiety) に関しましては、「相手を予期 (予想) しての防衛反応」と定義されています。つまりは直接的なものか、予期してかということで

恐れと不安に分けられています。

次に、身体的不安・認知的不安について話させていただきます。ちょっと古いですが、Engels が 2007 年に話しました、「気にしたことからくる目覚めと、気にしたことからくる懸念」です。これを身体的不安・認知的不安として定義づけました。

身体的不安は、右半球のはたらきの活性化と関係することが研究により明らかとなっております。また、左半球の活性化と関係することがわかってきた認知的不安は、別の言い方では「予期不安」とも呼ばれております。

次に、不安と関わる脳の様々な部位についてご説明させていただきます。

まず、扁桃体という部位が脳の中にはございます。扁桃体とは、感情と関わり合いのある出来事、特にネガティブな感情と関連した記憶の形成と貯蔵で主要な役割を担っていることが研究よりわかっております。また、扁桃体の損傷で、恐れを感じなくなるという臨床例も報告されております。これは、ペソア (Pessoa) という人が書きました Nature Reviews の Neuroscience に書いてあります。

次は、視床下部内側部についてお話しさせていただきます。ちょうど視床下部、扁桃体のちょっと上にあります。捕食者に対する生得的な防衛反応の表出と関連しているとか。また、あるいは、扁桃体や中脳水道周囲灰白質の結合を通して、攻撃性の感情と関連しているという研究がございます。

次に、先ほど出ました中脳水道周囲灰白質、または、中脳中心灰白質という部分になります。小さいで

不安と関わる脳の様々な部位のはたらき

- 扁桃体
- 視床下部内側部
- 中脳水道周囲灰白質
(中脳中心灰白質)
- 中隔海馬系
- 帯状回

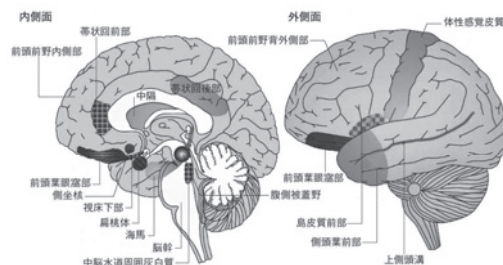


図1 情動に関連する脳部位

(Pessoa, L.: On the relationship between emotion and cognition, Nat. Rev. Neurosci., 9: 148-158, 2008 より一部改変)

掲載誌 (2016) 情動を生み出す「脳・心・身体」のダイナミクス：脳神経研究と神経心理研究からの統合的視座、高次脳機能研究、36(3)、265-270。

すけどこの部分になります。ちょうど中脳の脳幹の上あたりです。

ネズミの実験から、刺激の部位によっては、フリーズしたり、動かなくなったり、リラックスした姿勢で動かなくなったり、対照的な行動が起きることが確かめられています。また、functional MRI（機能的MRI）を使って中心灰白質の働きを人で見た最近の研究によりますと、ネガティブな感情とこの部位が関係あるということが明らかにされてきています。

今度は、中隔海馬系について話させていただきます。中隔海馬系、この絵ではどこだかちょっとわかりづらいと思いますので、もう少し脳の中のほうの画像を出させていただきます。中隔野と海馬を一つのシステムとして見なしたものであります。海馬は扁桃体と並んで大脳辺縁系の中でも最もよく研究されている部位です。

この部位が損傷を受けると、行動が抑制できなくなったり、短期記憶や作業記憶の障害が見られたり、空間認知地図の障害が見られたりすることが、特に動物の実験で明らかとなっております。実際に人にそういうことはできませんので、動物で実験しています。

中隔野は随意運動、感情、注意、そして記憶の形成と想起といった広い範囲の神経行動過程を調整しています。中隔野のこの働きは、海馬との間の連絡路を通して一つのシステムとして働いている結果であると考えることができます。

しかし、中隔野、あるいは中隔海馬結合が損傷されますと、学習が著しく障害されることになります。中隔と海馬の間の交互作用が情報処理において重要な役割を果たしていることは明らかですが、学習に対してはどのような影響を与えるかというのは、残念

ながら不明な部分がたくさんあります。

次に、帯状回です。帯状回は大脳皮質に接した、大脳辺縁系の部位です。脳梁というのは右の脳と左の脳を結んでいる神経の太い束でございます。脳梁を取り囲んだ位置にあり、大脳辺縁系の各部位を連結する役割を持っております。その働きは部位によって、感情領域、認知領域、記憶領域に分かれております。この中でも前帯状皮質は感情の大脳辺縁系と認知の前頭葉前野の双方との連絡路を持っていることから、感情の統制を行う神経回路を統合するうえで大きな役割を演じております。

多くの研究者は、この領域が葛藤（conflict）をモニターする役割を果たしていると考えております。

脳の話はここまでになります。次からはもう少しだけ内容になります。

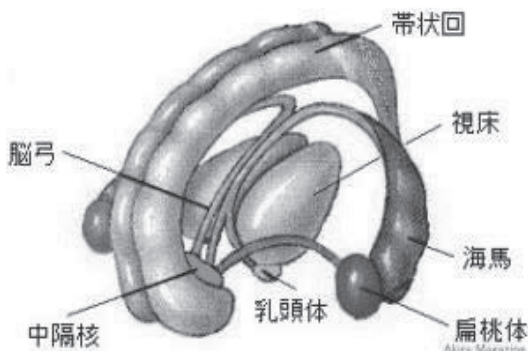
幻視ですね。「見えないものが見えてしまう」の話をさせていただきます。

シャルル・ボネ症候群というのがございます。そこにいるはずのない人や動物などが真に迫って見えてしまいます。人が「見る」ということは、「目で見る」というものと「脳で見る」、この2つの方法があります。「脳で見る」というのは、記憶にあるものを呼び起こし、それを映像として認識します。年がいくとなりますけれども、加齢黄斑変性症や緑内障などの病気で著しく視力が低下された方です。実際に見えにくくて目から情報が入りにくくなっています。それを補おうとすることで、「脳で見る」という機能が強まり、実際にはないものが見えてしまう。これがシャルル・ボネ症候群の幻視の正体と考えられています。レビー小体型認知症を患った患者さんが何か見えないものが見えてしまうというのも、シャルル・ボネ症候群の一つであるというふうなことも言われています。

次に、今度は見えてしまう。見えないものが見えるのではなくて、見えてしまうのです。錯覚のことになります。シミュラクラという言葉があります。人間の目には、3つの点が集まった図形を人の顔として見えてしまうという脳の働きがございます。

4つマスがありますので4つ写真を提示していきます。皆様、どのようにご覧になれるか。ご覧ください。

まず、1つ目の写真。目があって、何か口があるような感じ……。というか、私、情報誘導するわけじゃ



ないですけど、そういうふうに見えてしまいます。

次の写真、これは皆さん、日常でよく見るものです。

もう1つです。ちょっと恐いかもしれませんが。あります。

もう1つあります。いかがでしょうか。人の顔に見えてしまう。木ですよ。

コンセントが2つ。三相のコンセントですね。

これはシミュラクラという、見えてしまうという錯覚です。

次にパレイドリアという錯覚の画像をご覧ください。これは視覚刺激や聴覚刺激を受けとり、普段から知ったパターンを本来そこに存在しないにもかかわらず心に浮かべてしまうものです。

どうでしょうか。

次いきます。

次またいきます。

最後、ちょっと可愛いです。

なんか目があって、鼻があって、口があってみたい、なんかムンクの叫びみたいなのが、こういうふうなものに見えてしまう。パレイドリアというのがございます。

次にお見せしますのは、ホロウマスクというのがあります。ホロウマスク、いわゆるこれ、お面です。お面なので出張っている部分とへこんでいる部分、デコ(凸)とボコ(凹)がございます。へこんでいる部分にもかかわらず、光のあて方などで出張って見えてしまうホロウマスクというのがあります。

今ここにあるのがよくこのホロウマスクで出てきます。これ、アインシュタインの顔になります。ゆっくり動きます。どうでしょう？次はへこんでいるところが見えますが。膨らんで見えます。もっと速く回します。今度はゆっくりと回して、あるところで止めます。

ご覧になられてわかるとおり、こっちがデコ(凸)、こっちが膨らんでいるほうですね。こっちが膨らんでいるほう。こっちの中はへこんでいるのですけど、これがまた回転すれば、膨らんで見えてしまいます。これがホロウマスクという現象になります。

次にお見せするのは、ちょっと画像がよろしくないのでですけども、20世紀の終わりあたり、1998年あたりに流行りましたモーフィングという画像の見せ

方になります。よく狐女、狼男なんてありますけど、今回は、狼女、狐男を持ってきました。

狐の顔と狼の顔がだんだんと途中で人の顔に混ざって、最終的には人の顔に見えるようになります。いきます。ちょっと音楽が流れますので。

じわじわと変わっていきます。完全な人の姿が出てきます。

で、先ほどの狼だったのが女子の顔になって、狐だったのが男子の顔になりました。

このままでは狼も狐もかわいそうなので元に戻してあげましょうということで、今お見せいたしました画像、音楽、これを逆再生いたします。いきます。女狼、男狐です。ヒゲが生えて、だんだんと狐になってきます。はい。すいません。ちょっと長くなりましたけど、(女狐と男狼に)戻りました。

次に、シンポジウム、「妖怪と心理学」なので、今回は少し思考を変えてまして植物のことに移ります。

人間のことがわかるのか、わからないのか。考え方がわかるのか、わからないのかということで、クリーヴ・バクスター (Cleve Backster) という人がその昔、1966年にドラセナという植物にポリグラフ検査をしました。ちなみにクリーヴ・バクスターというのは、ポリグラフ検査、いわゆる嘘発見ですね、それを軍、FBIとか、警察で広めた有名な人です。

そのクリーヴ・バクスターがマッチで葉っぱを燃やそうとしていたところ、反応が出たということです。これがクリーヴ・バクスターです。クールカットしています。これがドラセナという植物です。日本名はちょっとわかりません。

これが葉っぱを挟んだときの電極になります。この葉っぱを挟んだときの電極の抵抗を記録した、チャートと言うのですが、記録用紙の絵がこれになります。バクスターが最初葉っぱをペンで叩いていました。ノイズがこう出ていました。そのうち、バクスターがマッチで葉っぱを燃やしてみようかと考えたところ、いきなりドラセナの葉っぱの抵抗値がこう上がります。そのままでは測れなくて、ここで機械の調整をしました。今みたいなコンピュータ制御の機械じゃないので、アナログ式のポリグラフです。調整しなきゃいけない。

ということで、この反応を見てバクスターが、もしかしたらドラセナは自分が葉っぱに火をつけようとしたことをわかっているのではないかなどと考え、

それ以来、バクスターは超心理学ですね、パラサイコロロジーの世界のほうにどっぷりに入って、いろいろと研究をしていきました。明確なことはまだわかってないということです。

ここにドラセナがいます。こちらには DUMP DISH DEVICE とありますけども、エビですね、小さな。川エビみたいなものを入れて、その川エビみたいなものを可哀想ですけど殺すのですね、潰すとか、のときに、こっちのドラセナがどういう反応をしたとかいうのをいろいろやりました。

「視覚」で捉える妖怪を見ます。五感で捉える妖怪ですね。ノビアガリ、シダイダカとか、ノリコシなどがあります。見る妖怪です。

次に聴く妖怪です。テングワライ、フルソマ、ヤマビコといいます。木を打つ音だとか、あとは大きな声を出す妖怪とか、アズキトギとか、タスキバヤシなんていうのもあります。

次が嗅覚です。臭いですね。ぬっぺふほふとか、白うねりというのがございます。ぬっぺふほふ、歩いた後なんか屍のような臭いがするらしいです。白うねり、これは廃屋とかにあります雑巾とか、布とかが湿気を帯びてなんか臭いを発しているような妖怪だと言われています。

次が味覚、味ですね。テンジョウナメ、アカナメ、油ナメ、ナマ女なんていうのもあります。

触覚、触る。ソデヒキ、カイナデ、イソナデ、ホオ

ナデ、精霊風などというのがあります。私は詳しくは知りませんが、カイナデ、京都のほうでなんか妖怪が出るらしいです。トイレの下から手がヒョット出てくるみたいです。

お次、河童ですね。「河童ブギウギ」というのがあります。私は見たことはないのですけれども、もしかしたらこの会場におられる先生方で実際に映画をご覧になられた方がおられるかもしれません。「河童ブギウギ」、調べたところによりますと、美空ひばりさんのデビュー曲だということです。

この歌詞を見ますと、夜だとか夜明けは嫌いとか、そのいうふうなのがあるので、もしかしたら河童というか、妖怪というのはもしかしたら夜型が多いんじゃないかということを思いました。実際に全部聴きますと長いので、4番目の歌詞をちょっとお聞きください。

河童ブギウギという、美空ひばりさん、こちらの顔です。ユーチューブでも「踊る龍宮城」で検索されると出てきます。美空ひばりさん、こんなふうに踊って。頭の髪の毛が河童の形になっています。これですね。河童の形に切ってあります。

次が先ほど見た視覚の次第高(シダイダカ)というのがあります。どんどん、どんどん見上げれば見上げるほど大きくなっていきます。なんか、物の本によりますと次第高に出会ったら下を向いておくといいらしいのです。次第高自体は上を見ると大きくなる。下

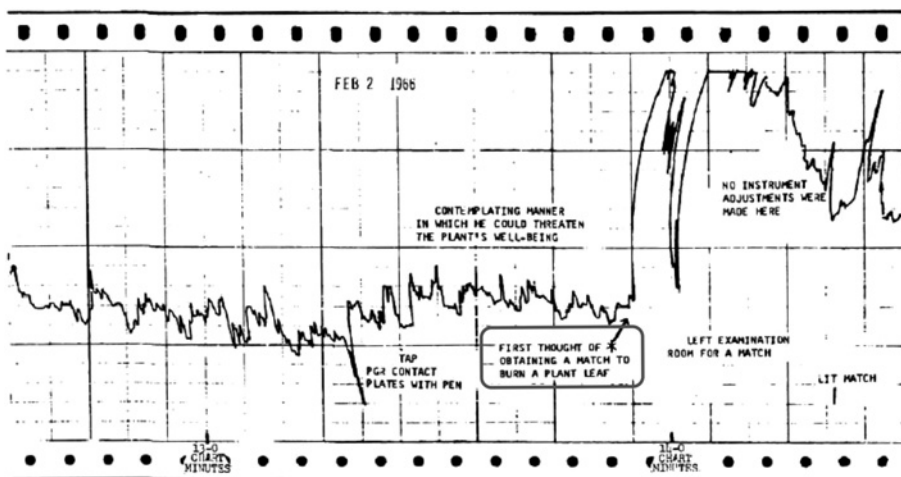


FIGURE 2

Section of the February 2, 1966 plant monitoring chart showing the reaction which occurred at the same time that the author thought of burning the plant leaf.

を見てみると、なんだ、自分のことを無視しているのかということでは消えるそうです。

次第高、こういう顔ですけども、次第高の顔を変えてみたらどうなるのでしょうかね。見た目が変わります。先ほどお見せした妖怪の中のいくつかから顔を持ってきました。次第高っぽくなるか、次第高とは全然違うかという感じになります。河童です。やっぱり次第高というのは、こういうなんかいかつい顔のほうが似合うんじゃないか。似合うという言い方は変ですけど、似合うんじゃないかということになります。

次にやまびこ。大きな声を比べっこする妖怪と言われています。やまびこも顔を変えてみます。配置は先ほどの妖怪と同じ配置にしています。顔を持ってきましたらこうなっています。

何でこんなことを持ってきましたかと言いますと、やっぱり古来から人の生活の中で妖怪というのは、いる、いないは置いていても妖怪はいたほうがいいとなったときに、昔は暗いところいろいろございました。今はと言いますと、いろいろな機械もありますし、宇宙ステーションから地球を見ますと日本列島の形が光って見えますよね。暗いところがなくなってきました。暗いところ、何かあそこになにかいるとかいうのが今の時代、なくなってきた。もしかすると、それが「失われたもの」かもしれないんじゃないかと考えております。

実際には、妖怪、いるか、いないかというふうになりますと、私はいないほうの立場をとっていますけれども、いたほうが皆さんというか、生活している人の心の平和とか、うまくいくとかいうならば、言葉は悪いですけども必要悪ではないかなと。もしかするとこの後、発表される高橋先生、飯倉先生から「軽部、何を言ってるんだ」と言われるかもしれませんが、私はいわゆる潤滑剤として存在していた。でも今の時代、科学が進歩して、テクノロジーが進歩して、だからそういうふうないわゆる物理的な環境でなくなったので変わってきたのではないかなとは思っております。

これにて軽部の妖怪の話を終わらせていただきます。

もうあと少ししますと除夜の鐘でございますね。これで、終わります。

ご清聴、ありがとうございました。

桐生：軽部先生、どうもありがとうございました。

軽部先生には、ご専門が精神生理学でありながら無理矢理、妖怪の話を振ってしまって、本当にご苦勞をかけてしまいました。私としましては、バクスター、非常に興味深く、彼が、超心理学にのめり込まなければ、もう少しポリグラフ検査が良くなっていたのにと思っているわけなんですけど。

続きまして、高橋先生にご登壇いただきます。それでは、高橋先生、よろしくお願いいたします。

■話題提供 2

高橋 綾子（東洋大学大学院）

高橋：東洋大学大学院の高橋綾子と申します。

私の研究テーマは「妖怪」です。社会における集団や個人を研究対象とする社会心理学の見地から妖怪を研究しています。本日は公開シンポジウムということで、心理学がご専門の方はもちろん、広くたくさんの方にお聞きいただける機会をいただき、大変光榮に存じます。どうぞよろしくお願いいたします。それでは早速、本題へとまいりましょう。

さて、今回のシンポジウムのテーマは「妖怪と心理学 私たちが得たもの 失ったもの」です。時代は平成から令和へと変わり、21世紀を迎えてから20年が経とうとしています。この十数年の間だけでも私たちを取り巻く環境が大きく変わったことは皆さまも実感されていることと思います。

私たちの生活は科学の進歩により、大変便利で豊かになりました。私たちの生活の中心となっている科学は、物事がどのように起きたかという過程「How」を説明してくれます。それにより、私たちの不安の多くは取り除かれています。なぜなら、不安というのは、いつ何がどのように起きるのかについての具体性に乏しい脅威、つまり、曖昧さや不確実性の高い脅威が引き起こすものだからです。かつてこの部分を担っていたのは妖怪でした。説明のつかない不確実で曖昧な出来事を妖怪のしわざだとし、不安を緩和し、共同体の共通認識として受容していました。現在は妖怪が担っていた多くの説明を、科学が担っています。たとえば、かつて雷獣のしわざだとされていた現象は、現代においては、帯電した積乱雲などと地上物の間に発生する放電、いわゆる落雷であると科学的に説明されています。

日頃、私たちはこのように、科学のもたらすどのよ

得たもの、失ったもの…?

＊ ものごとの過程 (How) を説明してくれる科学

過程 / How
どのように



雷獣

得たもの、失ったもの…?

＊ ものごとの過程 (How) を説明してくれる科学

過程 / How
どのように



落雷

うな過程でそれが起きたのか、という答えによって不安のない状態であるように感じています。科学による説明は妖怪の代わりとして一見過不足なくその機能を果たしているように見えます。では、妖怪は完全に科学に取って代わられて、忘れ去られたのかというところでもないようです。

たとえばこちら、「もののけミュージアム」。今年4月に稲生物怪録の舞台となった広島県三次市に開館しました。妖怪コレクターである湯本豪一先生から寄贈された約5,000点のコレクションを中心とした妖怪の博物館です。この中にももうおいでになった方もいらっしゃるかもしれません。驚いたのは、その人気の高さです。なんと開館から5ヶ月で入館者数10万人を突破しました。記事によると、10万人というのは年間入館者数の目標だったとのこと。妖怪関係者の間では、数年前から「こんな博物館がオープンするらしい」と話題になっていましたが、あらためて妖怪の人気の高さを表す出来事だと感じます。

そして、やはりこちらも欠かせません。「ゲゲゲの鬼太郎」。昨年の4月からテレビアニメ化50周年を

記念した第6シーズンの放送が開始されました。ご覧になっている方、いらっしゃいますか。何名かいらっしゃいますね、ありがとうございます。クールでイケメンの鬼太郎や、八頭身でハイヒールの猫娘も話題の今シーズンですが、現代の社会問題を取り上げた、その内容にも非常に注目が集まっています。「硬派な社会派」「大人こそ見てほしい」「周囲の40, 50代が絶賛」、そして「傑作」という文字が並びます。これらは昨年の放送開始当初の記事ですが、2年目の今年に入ってもその話題性は維持したままです。そして今シーズンのキャッチコピー「見えてる世界がすべてじゃない」。これは、本編が始まる前に毎回必ず入る鬼太郎のセリフの冒頭部分です。セリフは、「見えてる世界がすべてじゃない。見えないものもあるんだ。ほら、君の後ろの暗闇に」と続きます。初めてこのキャッチフレーズを見たとき、とてもハッとしたのを覚えています。なぜなら、これは現代を生きる私たちへの鬼太郎たちからの警告であり、私がいま進めている研究の根幹に関わる重要なキーワードだと感じたからです。

「もののけミュージアム」の盛り上がりや「鬼太郎」への注目度の高さからは、私たちがまだ妖怪を忘れていないということが改めてわかります。鬼太郎に至っては、単なるアニメのキャラクターというだけではなく、現代社会の問題を取り上げ、注目を集めています。科学に取って代わられた妖怪は、なぜいまだに私たちの身近にあるのでしょうか。ここで、あることに気づきました。今現在、科学が説明をしている過程「How」の部分以外に、妖怪が補っていた何かがあるのではないだろうかということです。

さて、ここで、妖怪が担っていた何かを探るべく、まずは妖怪がどのように研究されてきたのかを振り返っておきましょう。題して「5分でわかる！妖怪研究の歴史」。時間の都合上、5分しか取れなかったので無理やり楽しそうなタイトルをつけました。妖怪大好き！詳しいです！という方も基礎知識のおさらいということでお付き合いください。

現在に至るまで、日本における妖怪研究は民俗学や文化人類学を中心に進められてきました。詳しくは飯倉先生のご発表でお聞きできると思いますので、ここでは香川とフォスター (Foster) の2つの説を軸に、大きな流れをご紹介します。香川は、「江戸時代と1960年代の水木しげるの登場という二

度の転機によって妖怪は完全に娯楽と化した」と述べています。また、フォスターは、「妖怪は国民、国の比喩である」とし、日本そのものを表す概念であると述べています。そして、4つの契機で妖怪文化を整理しています。2つの説に共通しているのは、江戸時代と1960年代以降に大きな変革が起きた、という点です。これらの変革は国自体が大きく変化を遂げた時期であり、妖怪が時代の変化に大きく影響される存在であることを表しています。加えて、フォスターが2つ目の契機として挙げている明治時代について触れておきましょう。明治時代は日本の近代化が進み、西洋合理主義志向が強まった時代です。井上円了によって、妖怪学が定義されたのもちょうどこの頃です。円了により妖怪という名前は一躍脚光を浴びますが、円了は妖怪を合理的に解説し、科学的に解釈しようとしてしました。妖怪に対する「非実在」宣言がなされた時代に押され、妖怪や妖怪研究が消滅してしまうのかと思いきや、そうではなかったのがおもしろいところです。むしろこれらに抵抗するように、妖怪という存在は鮮やかなものになっていきます。柳田國男、江馬務ら、著名な研究者たちが「妖怪の実在性の有無を問わない」という立場で研究に取り組み始めます。このようにして、明治時代に「過去のもの」とされ「非実在」とされた妖怪は、戦後その実在性を問わないという形で復活することとなりました。その後、水木しげるの登場により妖怪が私たちに身近なものとなったのは記憶に新しいところです。

さて、このような変遷をたどってきた妖怪ですが、その定義も多岐に渡ります。多くの研究者はそれぞれの学術的見地から定義付けや分類を試みてきましたが、いまだ普遍的かつ総括的な定義とはなり得ていません。それもそのはず、妖怪の持つ多様性、地域性、そして時代とともに変化した続ける特性を鑑みれば、詳細な定義付けをするには様々な矛盾が生じ、解釈も困難です。これが、妖怪研究の歴史＝定義を試行錯誤する歴史と言われる所以です。

このように、定義や分類は多種多様であるのに、多くの研究者に共通している解釈があります。それが妖怪と「心」の関係です。民俗学者の柳田國男は妖怪を「われわれの畏怖というものの、最も原始的な形」と捉え、日野巖は、妖怪は「過去の人々の精神生活の一面を如実に示すもの」と述べています。また、現代妖怪研究の第一人者、小松和彦は「妖怪研究は人間の

心の研究であり、人間の社会の研究」と位置付けています。さらに井上円了は「妖怪研究は人心の秘蔵を開く唯一の鍵」と表現しています。これらの先行研究によって示唆されているのは、妖怪と心の関連です。しかし、心を研究対象とする心理学において、妖怪に特化した研究はほとんどなされていません。そこで社会心理学的観点から妖怪の研究を試みることにし、現在に至ります。現段階では、先ほど申し上げた、科学による過程の説明では補いきれていない、妖怪が担っていたであろう「何か」に着目し、研究を進めています。

ここで、これまでに行った探索的研究を駆け足でご紹介いたします。まずは情報整理をする目的で、妖怪辞典の内容分析による代表的な妖怪の類型化を試みました。結果はこちらの3つのグループが抽出されました。次に妖怪の類型化をもとに、以前妖怪が果たしていた機能を現代においては何が代わり担っているかを分類しました。結果は、こちらも3つのグループが抽出されました。次に、AIとのかっぱを用いて科学的なものとそうでないものの印象評価の違いを検討しました。結果は、AIとのかっぱだけでなく、統制群として入れた人間の友だちを含め、3種類とも異なる構成概念を持つことが示されました。さらに、科学的な帰属が困難な出来事に遭遇したとき、他者からの承認が感情喚起に与える効果を検討したところ、他者からの承認が安心感情を高める可能性が示されました。以上の結果からは、妖怪に本来備わっている機能と特性との関連が見られたことや、妖怪が個人内の結果ではなく、他者との関係性の中で生まれてきたことなどが示唆されました。

さて、以上のように妖怪の分類に始まり、科学と妖怪を対比させたり、個人内の帰属過程と他者からの承認について検討したりする研究を通して見えてきたものは、人が不安を感じたとき必要とするのは、どのようにして起きたのかという過程、Howを説明することだけではなく、理由、つまり「なぜそうなったのか」Whyを求めているということです。

たとえば、某クレジットカード決済のサービスで不具合が起き、一時、利用ができなくなったとします。復旧後、ニュースでは「データセンターで電源設備の不具合が起きたことが原因だということです」と報じられます。「どのように」Howに対しては、「データセンターの電源設備の不具合」によって利用

ができなくなったと科学的で明確な説明がなされています。では、次のような場合はどうでしょう。ある男性が一世一代のプロポーズをするために予約した高級レストランへ彼女を連れていきました。しかし、その日、彼の使っているクレジットカード決済のサービスで不具合が起き、利用できないと店員から言われました。仕方なく予約はキャンセル、楽しみにしていたデートは台無し、プロポーズも失敗に終わったとします。男性は、「なぜ？」と思うでしょう。「なぜ今日に限ってクレジットカードが使えなかったのか」と。失敗した原因はクレジットカードのせいだけではなかったとしても、です。

先ほどの説明、「データセンターで電源設備の不具合」はどのような過程でそれが起きたのかを教えてくださいますが、男性の「なぜ？」という問いには答えていません。どのようにして、という過程の説明では、彼の怒りや悲しみを引き取ってくれないのです。そして、「過程/How」と同時に、その「理由/Why」の部分も担っていたのがかつての妖怪なのではないかと考えています。たとえば、身近な水辺の事故はかっぱのせいだとされていました。川で子どもが溺れて亡くなった事故があれば、かっぱが子どもを水に引き込んだのだと捉えました。かっぱのせいにする事で、悲しみや罪悪感などのネガティブな感情の抑制に繋がっていたと考えられます。それはおそらく、かっぱが人間の力では統制できないものだからではないでしょうか。これを現代風に「過程/How」の説明にしてみると、「足を滑らせて川に転落し、死因は溺死でした。前日の大雨により水かさが増しており、地盤が緩んでいたため滑りやすかったことが原因の不慮の事故だと思われます。」いかがでしょうか。詳細にその過程がわかったとしても、子どもを亡くしたことに対する、なぜ？は消えません。

私たちは科学の進歩によって「物がどのように起きたのか」という明瞭で確実な過程についての説明を手に入れました。そしてそれは、世界共通の科学的根拠の上に成り立つものです。それは同時に、科学が代わりになり得たのは「過程/How」の部分だけだったということを表しています。

一方で、かつての妖怪や超自然的と呼ばれるものは「過程/How」に加え「理由/Why」の説明をも担っていたのではないのでしょうか。つまり、私たちが明瞭で確実な「過程/How」を得た代わりに失ったのは、

妖怪と現代日本人

* 過程 (How) と理由 (Why)

過程 / How
どのように

理由 / Why
なぜ

「理由/Why」の部分かもしれません。ひいては、それらが現代日本人の感じる生きづらさや心のゆとりのなさにも関連しているのではないかと考えています。

本日お話ししたのは一例にすぎませんが、生活の様々な場面で、妖怪のような超自然的なものに説明を求める考えを取り入れることは、私たちの生活をより豊かにする可能性があると考えています。今後は、現代人の心のゆとりに対する、これら超自然的なものの効果を検討すべく、研究を進めてまいります。この研究の最終的な目標は、妖怪を通して、現代社会のさまざまな問題に対する解決の手がかりを探ることです。この研究が、より良い社会生活を送るための手がかりになれば、大変うれしく思います。

発表は以上です。ありがとうございました。

桐生：高橋先生、お疲れさまでございました。

高橋さんは、今、私の研究室で研究をしているところでございますが、なぜ犯罪心理の研究室に高橋さんがいるかというのは深く追及しないでくださいということですけどね。本学の、東洋大学の社会心理学研究科は社会心理学の先生方が全員で院生を育てるというふうな教育方針ですので、その中で様々な先生からサジェスチョンをいただいて高橋さんは研究しているということですね。高橋さん、少しは犯罪の研究をするんですよね。

では、続きまして飯倉先生です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

■話題提供 3

飯倉 義之（國學院大學）

飯倉：本日はようこそお運びをいただきましてありがとうございます。ご紹介いただきました國學院大學の飯倉義之です。よろしくお願いいたします。

ここまでは、お二方、心理学、「妖怪と心理学」のお話だったのですが、私は心理学ではなくて、文学、民俗学の人間ですので「妖怪と心理学」ぐらいのウエートでお話しすることになるかと思います。

今回は、心理学を専攻されている皆さんに聞いて欲しい妖怪のお話ということで時間をいただきます。

まず、ここまで「妖怪」と言ってききましたけれども、妖怪という言葉は近代に一般化した言葉で、そんなに長い歴史があるわけではありません。先ほどのお話に出ました、この東洋大学を創設された井上円了先生が「妖怪学」ということで世の中の不思議現象を広く学問の俎上にあげた。そこで妖怪という言葉が一般化していきますので、井上円了先生以来、妖怪という言葉が使われるようになっていきました。

では、それ以前は何と言っていたかということ、古代には「モノ」や「オニ」、または「サバエナスカミ（蠅声なす神）」つまり悪い神、などと言われていました。

そして、中古・中世、源氏物語や平家物語の時代になりますと、それらのものが「物の怪」や「鬼」「天狗」といったような語で表わされるようになります。

そして、近世期には「化物」、そしてその幼児語である「お化け」というのが、こういった超自然的な存在を表わす一般的な言葉になっていきます。

ですので、時代を無視して「妖怪」という言葉でひっくるめてしまうというのは必ずしも正確ではないわけなのですが、ここでは、それらのものを総称して「妖怪」と呼ばさせていただきます。

古代～中古の、奈良、平安の時代の特徴としましては、それらの妖怪というのは、図像化・可視化されない。絵に描かれることがほとんどないということです。といっても例外はありまして、国宝になっている「玉虫の厨子」には羅刹という、お釈迦様の前世を食べてしまった鬼が描かれていますし、内裏、宮殿の清涼殿というところには、手長足長という足の長いおじいさんが手の長いおじいさんを肩車しているという、そういうびっくり人間の類いが描かれていました。これらに共通するのは、仏典や漢籍の由来という外来知識のものということです。つまり、遠い外国の不思議なものは描かれることがあった。

なぜかという、そういう「カミ」や「オニ」「モノ」を描いてしまうと、それらと呼ば寄せることにな

る。名前を呼んだり姿形を描いたりしたら、それらが実体化して何か祟りをなすのではないかとというような惧れを持っていたのではないかと考えられます。遠い外国の不思議な存在は描いてもまさかこの日本までは来ないだろうということで、しっかり描くことができたのではないのでしょうか。ほかにも寺院ではこの時期、鬼瓦などがつくられていますが、これも仏教の教えとともに入ってきた外来のものだったから抵抗がなかったのだらうと思います。

古代～中古の人たちは、そういった目に見えない恐ろしいものが生活を脅かすという真剣な恐怖の中に生きていたと考えることができます。本当に平安時代人とか迷信深いですからね。方位とか、日の巡りとかをすごく気にしていました。

そういった状況が変わり始めるのが平安末期、だんだんと武士の時代になってくる頃からです。疫神（えきしん）、つまり疫病を振り撒く悪霊、怨霊（おんりょう）や、鬼、土蜘蛛といった人に害をなす存在が図像化される。また、式神や護法童子など、陰陽道や仏教の力で使役される、目に見えない、いわば陰陽師や僧のガードマンですが、それらのものが絵巻物などに描かれていくようになります。

一例を挙げますと、こちらは、「北野天神縁起絵巻」です。御霊（雷神）と化した菅原道真。菅原道真が政敵にはめられて失脚しまして太宰府に流されて亡くなってしまう。その後、天神、天の神様になって京の都に雷を落としたり、疫病を流行らせたりする。その怒り狂っている菅原道真の姿を、今、われわれが見ると雷様と思えるような姿で描いている。

それからこちらは「信貴山縁起絵巻」の護法童子というものです。奈良県にある信貴山の高僧で命蓮という人が帝の病氣平癒の祈祷をしたところ、帝の夢に、空飛ぶ車に乗って体中に刃をまとった、剣の護法という護法童子が現われて、疫神を退治して、それで帝は具合が良くなったという逸話ですが、そういう法力で遣わされた童子が描かれています。

もう一つ、こちら「是害房絵巻」というものなんですけれども、中国から天狗がやって来て日本の僧を墮落させようと思って比叡山の僧を襲おうとするのですが、僧に近づくと制多迦童子、金伽羅童子という不動明王のお付きの護法童子が現われて、事前に天狗を追い払ってしまいます。

ここでは普通の人には目に見ることができないも

のが、絵にされて表されるようになっていきます。おそらく何の素養もない一般の人には、天狗も制多迦童子も金伽羅童子も目には見えない。しかしそれを図像化して一般の人にも示すようになっていく。

ちなみにこの後、是界坊という天狗は制多迦童子、金伽羅童子などにひどく打ちのめされて体中の骨を折られてしまい、日本の天狗がかわいそうだと温泉につけて、湯治で治して中国に帰してあげるといふ、かなりユーモラスな展開になりますので、興味のある方は絵巻物集成などで探してご覧いただければと思います。

次にこれは「酒吞童子絵巻」です。源頼光とその配下の四天王、これは京の都で土蜘蛛などを退治して回った平安時代のモンスターハンターチームです。そこに藤原保昌という豪傑を加えた6人が、大江山に立て籠もっては都を荒らし、人をさらって食う酒吞童子と配下の鬼たちを退治するという絵巻物です。

山伏に化けて酒吞童子の館に潜入し、鬼が飲むと毒になり、人間が飲むとパワーアップするというお酒をしこたま飲ませて悪酔いさせた後、完全武装して寝込みを襲うという、卑怯に卑怯を重ねた手段でやっと倒します。このシーンは酒吞童子の首が最後の一撃で、宙を飛んで頼光の頭にかじりついたんですけれども、兜を二重にかぶっていたので助かったという図です。

こういうふうに見えないものたちは、物語絵巻や奈良絵本がつくられていく平安時代末期から中世にかけて相次いで図像化されていきます。

この図像化は、人間が神仏の力で鬼や物の怪、天狗たちを調伏、退治することができるようになってきた頃に始まっています。平安時代までの人たちは、出会わないように、出会わないようにと怖がり避けているだけだったのですが、神や仏の力を借りたり、武士の強い武力があったりすればそれらのものを退治できるという自信がついてきた頃から、鬼や天狗、物の怪、疫神などが図像化され始めます。

その背景には、社寺や武士団のPR活動という側面もありました。「わが寺には、このような素晴らしい験力のある高僧がおられたのですよ」「わが武士団はこんな恐ろしいものを退治した英雄を始祖としているのです」ということを喧伝するには、退治されるものは恐れれば恐いほどいい。守ってくれる護法童子や式神は強そうなら強そうなほどいい。そういった説話を絵巻物などに示すことで、新しく帰依する者を集めたり、一族の結束を深めたりといった効果を狙っていたと言えます。

そして、江戸時代になりますと、先ほどの高橋先生のお話にありました香川雅信さん、フォスターさんの言われた第一の転機ですけども、江戸時代には合理精神と社会・技術の発展がありました。われわれは江戸時代の人はずいぶん迷信深いような気がしてしまいますけれども、江戸人には江戸人なりの合理精神があって、単に迷信深いただけじゃなかったのです。

それから社会や技術が発展しまして、例えば、灌漑用水を整備することによって日照りに備えるとか、自然災害などにもだいたい立ち向かえるようになっていく。人間が自然をうまいこと乗りこなしていける

〈視えないものたち〉の図像化 →物語絵巻・奈良絵本の流行



『酒吞童子絵巻』（室町期、国際日本文化研究センター蔵）
源頼光と四天王・藤原保昌が、都を荒し人を食った大江山の酒吞童子と配下の鬼たちを退治する。

という自信がついてくるわけです。そうすると、ある意味自然の擬人化という側面を持っている妖怪というのは、相対的にその脅威が弱まっていきます。

例えば江戸っ子の流行り言葉に「野暮と化物は箱根から西」「この次と化物は見たことがない」なんていうのがありました。

「野暮と化物は箱根から西」というのは、江戸は粋なやつばかりいる都市だから野暮と化物なんて古くさいのは、箱根から西、京都・大阪の古い人間しか信じていねえんだよ、ということです。

それから「この次と化物は見たことがない」は、これ、今でもそうだと思いますけど「じゃあ、今度、次また一杯やりましょう」って、絶対実現しないんですね。だから「この次と化物は見たことがない」。つまり、化物なんて本当はいないんだ。ああいうのは子どもだましなんだという認識が江戸人にはあったということです。

余談ですが、この「野暮と化物は箱根から西」の「箱根」を穴埋めさせる問題を試験に出しますと、学生はよく「野暮と化物は『東』から西」って間違えるんです。そういうことじゃないんですけどね。

先ほど高橋先生が名前を出された香川雅信さん、兵庫県立歴史博物館の主任学芸員で、博士論文を「妖怪文化」で書いた本物の妖怪博士だと名乗っている方ですが、その香川さんはこの江戸期の変化を「江戸の妖怪革命」と呼びました。江戸期に妖怪というもののリアリティ、恐ろしさが減退し、そしてその面白い姿形が注目されて娯楽になっていくのです。

例えば江戸に入ると、百物語をすとか、七不思議を制定して楽しむとか、また肝試しやお化け屋敷、怪談噺、「牡丹灯籠」だとか、「真景累ヶ淵」とか。それから涼み芝居、歌舞伎の中の幽霊が出てくる芝居、四谷怪談とか、化け猫ものとか、こういった娯楽が出てきます。

こうした娯楽は、妖怪や幽霊は本当にはいないだろう。本当にはいないと思う。でも、もしかして……、と思っているから楽しむことができる。平安時代人のように真剣に恐れていたならば、百物語なんてもうとんでもないことですよね。百語ったら本物の化物が出る。本当に出る。世の中にそういうものが本当にいて、われわれを崇ろうとしているんだと思っていたらこんな遊びは恐くてできない。本当はお化けなんていないんだ。でも……、という意識になってきたから、こうした娯楽が成立するのです。

この絵は「童戯五拾三次之内」のうち、四日市宿を描いたものです。伊勢の四日市にあった遊戯施設で「からくり的」と言いまして、吹き矢を吹いてこの的に当てると、ひとつ目小僧や次第高といった妖怪たちがパッと飛び出してくる、というものです。お化けの登場を娯楽にしていたのがよくわかります。ちなみに香川雅信さんはこの遊戯施設を「江戸のバイオハザード」と呼びました。ゲームの『バイオハザード』シリーズにかけてですけどもね。

こうして都市部ではだんだんと妖怪がリアリティを喪失していきます。もともと妖怪は村社会、村落共同体を取り巻く自然の中で起きる不可思議な現象の説明としてあった。つまり、軽部先生が言われたように五感として存在していたのが妖怪でした。それが都市部では近世期にリアリティを失って、娯楽のための知識として流通し始めます。このときに、「画図百鬼夜行」などの、妖怪を描いた浮世絵等々もたくさんつくられて消費されていきます。

そしてさらに近代、西洋合理科学の思想が啓蒙されて、妖怪は「迷信」というところに閉じ込められていきます。そして、これがフォスターさんの言う第2の転機です。そうした啓蒙活動、妖怪なんていうのは本当はいないのである。錯覚や誤解、思い込みなん

江戸時代：合理精神と社会・技術の発展

- ・「野暮と 化物は 箱根から西」
- 「この次と 化物は 見たことがない」
- 「化物なんて本当はいない」という認識

香川雅信（兵庫県立歴史博物館学芸員・本物の妖怪博士）
「江戸の妖怪革命」

江戸の妖怪革命：化物が娯楽に

- ・怖さを楽しむ：「百物語」
- 「七不思議」「肝試し」
- 「化物屋敷」「怪談噺」
- 「涼み芝居」



妖怪のリアリティの喪失

だ、というような啓蒙活動には、井上円了先生も一役買っておられます。

こうして近代、妖怪は無効化されていくのですが、この無効化とは、先ほどの高橋先生のお言葉を借りると「妖怪が Why を担わなくなっていく」ことです。原因を妖怪で説明しなくても現象が物理学で説明できるんだ、こういう現象は医学的に説明できるんだということで、妖怪が原因を担わなくなっていく。

無効化された妖怪は、そのまま消えるかと思えば消えませんでした。妖怪は近代以降、前近代の日本人を知るための研究対象として注目されていきます。その中でも2人、妖怪を主に対象にしていった人たちを指摘できます。まずは先ほど名前が挙りました日本民俗学の創始者の柳田國男。柳田は日本人の民間信仰を知るための民間伝承、民間で伝えられていた知識として妖怪を捉え、そこから日本人がどういう靈魂観や信仰心を持っていたかということを知るための材料にしようと思いました。

そしてもう一人、江馬務という人。この人は歴史家で風俗史学という、かつての歴史上の人たちがどういう衣食住などの生活をしていたかということを絵巻物などから知るという学問をつくった人ですが、江馬は近世の絵画資料を用いて、妖怪から「異形なるもの」の意匠、どういうものをこの世ならぬものと考えてきたかという、そういうデザインを探る風俗研究資料として研究対象としました。

どうして妖怪が研究対象になるのか。近代以降、妖怪は本当にはいないということになりました。本当にはいないのに、こんなに情報や図像が残っている。ということは、これは日本人の想像力や信仰心の結晶なのである、と柳田、江馬は考えていきました。本当にはいないものを想像し創造する、そのイマジネーションの根底にある、ものの考え方、感じ方というのは一体何なのかということで、妖怪が研究対象になっていったのです。柳田國男は民間に伝わっている言葉で伝えられた伝承の情報として妖怪を捉え、江馬は近世にたくさん描かれた図像として妖怪を捉えた。情報の柳田、ビジュアルの江馬というふうに言うことができるかと思います。

これがフォスターさんの言う20世紀初頭の妖怪の転機に該当するものです。

そして、最後の転機、1960年代です。水木しげる

による妖怪イメージの確立。これが今の私たちの妖怪感を形づくっていると言って過言ではありません。

ちなみに本日、11月26日は「ゲゲゲ忌」、水木しげるさんの4回目の命日ということで、調布の深大寺ではいろいろ催し物があるということで、そちらを蹴って、よくぞこちらに来ていただきました。ありがとうございました。

戦後、水木しげるが紙芝居や貸本マンガとして描いていた「鬼太郎」が、週刊少年マガジンの連載としてメジャーリリースされるのが1966年です。

貸本の「墓場鬼太郎」時代は、エドガー・アラン・ポーの世界のような、怪奇とスリラーを前面に出した作風だったのですが、子ども向けの週刊連載では大人びていて難しすぎて受けませんでした。そこで水木サンは、超能力を持った不思議な少年「ゲゲゲの鬼太郎」が、騒ぎを起こす妖怪と対決して静めるという、妖怪対鬼太郎の1話完結のフォーマットに変えていきます。これが当たりして「ゲゲゲの鬼太郎」は人気作品になりました。

1話完結ですと、敵役や味方役の妖怪たちが毎回必要になってきます。水木さんは作中の妖怪たちを民間伝承と絵画資料をヒントに創作しました。

柳田の民間伝承の妖怪は語り継がれた情報のみで、どういう姿形かが伝わっていない資料が大半です。そこに水木サンがいかに妖怪っぽい姿形を、ビジュアルを創作して一つのキャラクターにしました。

そして江馬務が集めた近世の絵画の妖怪、これは図像、ビジュアルだけで、どういう妖怪なのかという情報がない資料が大半です。そのビジュアルのみの妖怪に水木サンがいかにそれっぽくて、マンガに描いて面白いような能力とか、情報とかを付け加えて一体のキャラクターにしたのです。

情報だけあってビジュアルのない柳田のものにはビジュアルを描いちゃう。ビジュアルだけあって情報のない江馬のものには情報をつくっちゃうということで妖怪キャラクターを創作する。こうやって水木しげるは妖怪の絵を創造していきました。

ちなみに鬼太郎ファミリーと言われる味方キャラクターのうち、紙芝居に先例のある猫娘と、創作のねずみ男はちょっと置いておきまして、子泣き爺、砂かけ婆、一反木綿、ぬりかべはいずれも柳田國男の『妖

怪名彙』という、妖怪の名前を集めた報告が基です。しかし姿形の描写はほとんどされていない。砂かけ婆に至っては、奈良県の神社に出るというのですが、「誰も姿形を見たことがない」とあるんです。何で婆だとわかったのでしょうか。こうした情報に、いかにも砂をかけてきそうなお婆さんの姿を付加して、新しいキャラクターとして創造したのです。

これは余談ですけども、水木サンはすごく用意周到でしてね。何がかといえ、水木しげるが初めて絵を付けたので、この味方の妖怪たちはマルC(著作権マーク)水木しげるになるんですね。著作権は水木サンにある。これは江戸時代のキャラクターを使っちゃうと著作権フリーになってしまうので、水木サンはすごくよく考えているなと思います。

そして、水木しげるがつくり出した妖怪キャラクターが世に広まるにつれ、われわれは名前と容姿を備えた日本の土着の超自然的存在を妖怪と考えるようになりました。姿形のビジュアルと能力や来歴の情報があって、それが日本土着っぽくて、何か人間を超えたような力を持っている。そういう妖怪というのは、民間伝承の妖怪でも絵画に描かれていた妖怪でもない。つまり、1960年代に水木しげるがつくり出した妖怪キャラクター。京極夏彦さんが言う「通俗的妖怪概念」と言えます。

それまでの妖怪、生活に息づき、その中で五感に感じるものだった妖怪ではなく、妖怪キャラクターとして知識として捉えられる妖怪というのがここで現われてきたというふうに考えることができます。

つまり、もう妖怪というのが五感で感じるものではなくなくなってしまった。紙とインクで伝承されるもの、マンガや本、妖怪事典といったような媒体を通じて知識として受け取られるものであって、野山や川や海で五感で感じて、生活の中で感覚や不安を担うのではなく、「というのがいるんだよ」という知識になってくるのです。

つまり、カイナデという、夜道で頬を撫でてくるといふ妖怪ならば、誰もいない夜道で頬を撫でられたような気がする。誰かに話すと「ああ、お前も？あの辺にはカイナデが出るんだ」と体験を伴って伝承されていくのではなく、事典項目「カイナデ、野原で頬を撫でるとされる妖怪」というように、生活を離れた知識として今のわれわれは妖怪を知るのです。

近代の都市においては、妖怪の生活の中でのリア

リティは喪失してしまっている。五感で感じる経験としての妖怪はほぼなくなってしまっています。むしろ、そうしたリアリティは、心霊や学校の怪談、都市伝説などにシフトしていると考えられます。妖怪の知識は、子ども向けの妖怪事典とか、妖怪マンガといったようなものを読んで知ることになります。子どもたちはトイレの花子さんとか、テケテケとかには、もしかして出会ってしまうかもしれないという怖さを持てるかもしれませんが、道を歩いていてヤマビコに出会うかもしれないとか、そういった恐ろしさは既にはいはずで。

ここでは、妖怪が2つのレベルになっていると言えます。1つはかつて妖怪が担ってきた不安や何かの原因となる説明のレベル、そしてもう1つは妖怪というキャラクターがいるという知識のレベル、この2つが並行して存在しているのが現状です。

そして、キャラクターとしての妖怪は自由な想像の中に投げ込まれる。現在の妖怪は創作の中でキャラクター化し、さらにペット化、そして人間化しているといえます。妖怪は妖怪という属性、マンガ等に出てくるキャラクターの属性にすぎなくなっています。現在の妖怪キャラクターは、妖怪の恐ろしさや不気味さを取捨選択した形でつくられがちです。

そして、キャラクターなら可愛く、美しく、楽しいほうがいいよねということになります。マンガやゲーム、ライトノベルのキャラクターとしての妖怪は、ペットのように描かれたり、恋愛対象になり得る人間のように描かれたりすることが多くなりました。そして妖怪と戯れて人間が癒やされるという、そういうような図式まで出てきます。

高橋先生と私がお世話になっています「怪異怪談研究会」という、文学系のなんだか楽しそうな研究会があります。その会での発表で近代文学研究の乾英二郎さんが「優怪(ゆうかい)」という概念を提唱されました。定義としては「人間を癒やしてくれる存在としての妖怪的なキャラクター」ということです。マンガなどでは、人間が妖怪の学校の先生になって癒されたり、会社に出る地縛霊の幽霊と触れ合って癒されたりするんです。もうこれ、妖怪じゃない。優怪だ。優しい怪だ、という指摘なんです。創作においてはこういうところまで来てしまっています。

妖怪の人間化というのがどこまで進んでいるかという例として、あるパソコンゲームのチラシを

お見せします。作中に登場する10数人の学生のキャラクターが描かれているんですが、この中に妖怪がいます。ここで問題です。だれが妖怪でしょうか。シンキングタイムスタートです。

(ややあって) 答え合わせをします。2人を除いて全員妖怪でした。こういうふうに見分けがつかない姿で妖怪が描かれます。もう妖怪という属性、妖怪という能力を持っている人間というふうにしに描かなくなっているのです。つまり、妖怪というものがそれまで担ってきた不安とか、恐れとか、不思議な物事の原因であるようなリアリティというのが圧倒的に失われ、現代では妖怪という知識が流通している状態にあると考えることができます。

私たちが失った妖怪の恐ろしさのリアリティというのは、生活の中の妖怪感と言い換えることができるかもしれません。妖怪のキャラクター化というのは、妖怪に背負わせてきた共同体の不安解消装置、Whyの担い手といったものが徹底的に無効化された後の姿であるでしょう。われわれが失ったものは、共同体において説明不能な事象の原因を妖怪として納得するという機能、妖怪が生活空間の境界、端っこのほうで出会うかもしれない、そういう恐いものであるかもしれないというリアリティです。そして、民俗知識で対処可能な不安という安全弁をも失ってしまいました。妖怪って結構安全なんです。砂かけ婆は砂をかけてくるだけですし、見越し入道は下を見ればいいだけですから、対処法があったり、出現する場所や時間が決まっていたりして、避け方がわかっている。

でも、先ほど出したような都市伝説や学校の怪談のキャラクターというのは、そういう特徴が設定されていないことがほとんどです。例えば、砂かけ婆が竹藪から砂をかけてくるんだったら砂をかけられたら終わりますけども、不審者が竹藪に籠もって砂をかけているとしたらどうでしょうね。次の瞬間、出刃包丁を持って出てくるかもしれないんです。こういうふうには砂かけ婆に押しつけとけば解消された不安が解消されなくなっている。

その代わりにわれわれが何を得たかと言うと、妖怪なんぞはいないという安心感、それから妖怪という日本文化などの面白い概念・知識、そして創作における妖怪というキャラクターという広がりです。妖怪のキャラクター化は、妖怪という想像上の優し

い他者が想像力の類型に加わったということです。そうしてその代わりに、不安の説明装置、共同体の安全弁としての妖怪を失ってしまったといえます。

得たものと失ったもの、天秤にかけるとどうも釣り合っていないような気がします。しかしこういう日常をとりあえずわれわれは生きるしかないよねということです。

お話をここまでにしておきたいと思います。ちょっと時間をオーバーいたしました。ご静聴ありがとうございました。

桐生：飯倉先生、ありがとうございました。

盛りだくさんのお話でした。飯倉先生には、日本心理学会でも話題提供をお願いしたところなんですが、とにかく水木しげるのマンガで妖怪を知った世代としては、非常にショックな話だったということのをちょっと記憶しており……、今日もまたショックを受けてしまいましたけども。

それでは、続きまして、指定討論を吉川肇子先生よりお願いいたします。よろしくをお願いいたします。

■指定討論

吉川 肇子（慶應義塾大学）

吉川：ご紹介ありがとうございます。慶應義塾大学の吉川です。

最初に私なりに先生方のお話を整理いたしまして、私は、コメントというよりもすべての先生に同じ質問が2つありますので、それをちょっと先生方にお答えいただければというふうに思います。

私なりに各先生、ご専門違いますので、どういうお話だったかなというふうに考えてみますと、全部の先生、お三人とも、どうして妖怪というものが起きるのかというのはおかしいかもしれませんが、妖怪というものがどう起こってきたのかというメカニズムをそれぞれご専門の分野からお話されたと思います。

それから高橋先生と飯倉先生は、妖怪というものが例えば、共同体なり、日本の社会なりにあるとして、それをどういうふうに私たちが伝統的に共有してきたかというような話をされたのかなと思っています。これは今日のお話の核心だったと思うんですけども、妖怪が担ってきた機能ですね、それから機能と言っていいかどうかわかりませんが、特にお二方とも理由づけというのか、Whyというのか、不

安の解消というのは、高橋先生がおっしゃっていたと思うんですけど、そういうところをお話しされていたのかなというふうに思います。

それからいろいろな分類があるのだというのは、高橋先生がデータでお話をされていたと思うんですけども、同内容のことは、どの先生もされていたかなと思います。ひょっとすると私が聞き落としていることもあるかもしれないので、スライドに「他には？」というのを入れました。

これらのお話からそれぞれの先生に質問するよりも、私は全部まとめて同じ質問に対して、各先生方にお答えいただきたいと思っているんですけども。

科学が妖怪を駆逐すると言うんですかね、ちょっと言い方が良くないかもしれませんが、妖怪が Why を担っていたんだけど、そのプロセスを説明する科学が出てきたことによって妖怪は私たちの社会からいなくなってしまったのか？みたいな話をしたいと思います。

ちょっと「妖怪研究は考古学か？」みたいな話を、考古学の先生をディスってるみたいですけど、全然(そういう)意図はなくて、私が高校時代に考古学部にいたというので、考古学というのは関連したんですけど、つまりもう今となっては新しいものが出てきていないものを分析するようなというふうなイメージにとっていただいたらいいと思うんですけども、そういう学問なんでしょうか。前進するんでしょうかというのをちょっとお聞きしたいです。

それに関係してなんですけど、恐れや不安が生起のメカニズムに関係するんだとすると、駆逐するの？と聞いておいて、いや、駆逐してないんじゃないの？という聞き方はおかしいのかもしれませんが、妖怪とは言ってはいないけれども別の形で既に現われているということがあるんでしょうかということですね。先ほど、飯倉先生のお話の中で「キャラクターとしての」というような言い方があったと思うんですけども、それは一つかなと思ってお聞きしました。

よくわからないものについて、じゃあ、科学が全部解決しているのかということそんなことはなくて、ちょっとこれも雑な言い方ですけども、スピリチュアリズム的なものってまだ私たちの社会に溢れているわけですね。迷信と言ってもいいかもしれ

ませんけど。あるいは、最近は特にそういうことがあるかもしれませんが、姿形は妖怪っぽくないけど、でも何となく神様が何とかしてくれるみたいな話はどうでしょうか。飯倉先生のお話で言うとひょっとすると先祖返りになるかもしれませんが、神様になっちゃうようなことです。神様が妖怪になってるというのか、妖怪が神様になってるというのか、そういうことなのでしょうかとというのが最初の質問です。科学と妖怪の関係みたいなことをちょっとお聞きしたいです。

それに関係するんですけども、これから新しい妖怪が生まれる可能性はあるんでしょうかということですね。これって、どの先生もおっしゃっていたように思うんですけど、妖怪学って結局定義をめぐってずっとお話しされてるとか、あるいは、新しい「優怪」というようなコンセプトがあるということ言われていたと思います。もちろん、その妖怪の定義をどうするかにもよるかなと思うんですけど、新しい形での妖怪が生まれる可能性はあるんでしょうかというのは、見通しをお聞きしたいです。あるいは、それは新しい形の妖怪なのか、それとも旧来の形での妖怪なのかということです。

特に、軽部先生は目に見えるっていうようなことをすごく大事にされていたと思います。そして、暗いところに、後ろにいたかもしれないものが、後ろまで明るくなってしまったときに、妖怪が出てくる可能性が少なくなってくるというようなお話だったのかなと思うんですけども、それは目に見えるということがキーになるのでしょうか。これは、さっきのスピリチュアリズムの話とも関係してちょっとお聞きしたいところです。つまり、妖怪が目に見えるものなのかどうなのかというのかがすごくキーになるかどうかというのをお聞きしたいかなと思います。

以上の2つの質問を先生方に順番にご意見を伺えたらというふうに思います。

桐生：先生どうもありがとうございました。どうも拍手、皆さん、ありがとうございました。

このスライド、出したままでよろしいですか。

吉川：はい。そうですね。

桐生：各話題提供の先生方、壇上にパイプ椅子を上げますので、お座りいただけますでしょうか。

ここに並んで座っていただいて。

では、今、いろいろご質問がございましたが、吉川

先生、じゃあ、この質問に沿って答えていただいてよろしいですか。

吉川：そうですね。実を言うとかいう学会のシンポジウムにありがちなことなんですけど、既に先生方とはちょっとディスカッションしております、お答えを少し聞いたので、軽部先生に最初の質問をお聞きしたいと思います。

桐生：わかりました。では、軽部先生、もう既に予習はなさってきたとは思いますが、いかがでしょう。軽部先生、お答えいただけますか。

吉川：科学じゃないというお話をちょっとお聞きしたかなと。すみません。

軽部：科学をどう捉えるかだと思うんですけど、科学が今まであった妖怪というものを駆逐するののかというと、科学でなくて、科学が主体となってい々ゆるテクノロジーがどんどん発展していった。テクノロジーが発展していった社会故に、本来暗いところで何か感じるとか、そこにいるぞみたいのはもうこんな明るい、先ほどまで暗かった部屋が明るくなってしまっ。じゃあ、今、実際には？という、今まで言われていた妖怪というのがいないんじゃないかみたいになる。

そうなるともしかすると、駆逐するのと言われてしまっ、駆逐するのかもしれないし、そうではないのかもしれないし。それからい々ゆる科学が発展して、テクノロジーができて、それが故に巡り巡って今までの妖怪というのが、考え方、見方、社会的な捉え方というのが変わるんじゃないかなと個人的には考えています。

桐生：軽部先生としては、科学は妖怪を駆逐する……。

軽部：するんですかね。

桐生：どうなのでしょう？

吉川：先ほどの話ですと、テクノロジーが駆逐するみたいなお話だったかなと。

軽部：テクノロジーですね。

桐生：はい。わかりました。

高橋先生、お願いいたします。

高橋：はい。科学がというよりは、人間が科学を選んだのかなと考えています。やはり科学によって私たちの生活はこれだけ便利で豊かになっているので、科学という何か塊があって、その塊が妖怪をギュッと押しやったというよりは、われわれ人間が

科学を選んできたから、今は妖怪が追いやられているというようなイメージであります。

桐生：では、飯倉先生。

飯倉：そうですね。テクノロジーや科学の考え方が妖怪をそのまま受け入れづらくしたというのは、その通りだと思います。暗闇が照らされてしまうとそこに何もいないことがわかってしまうので、想像力が働かなくなるし、雷獣と雷の関係のように説明がつけられてしまうもの、空から獣は降ってこないとわかってしまうことがあるわけですが、それと同時に妖怪のようなわれわれが持つ不思議なものへの想像力自体はなくなるわけではなくて、別のところに受け継がれていくのだらうと思います。われわれは、それを別の何かに転化したのだけど、それは妖怪と思わない。つまり、科学はこれまで共同体が民間伝承として担っていたような形で妖怪を受け継ぐことを難しくしたけれども、そこに使われていた想像力は別の形で現在も放出されているだらうと。つまり、われわれが思う妖怪だとしてきた民間伝承などを研究している限り考古学になっていくんだけど、それがどう今、形を変えて、われわれの生活の中でシレッと機能しているかということを考えていくと、現在学になるだらうと思います。

スピリチュアル的なものとちょっと親和性のある、科学のフリをした、科学の皮を被った技術というのは、今、私たちの生活の中に溢れていますよね。マイナスイオンですとか、波動を生み出す水ですとか、微生物の団子を水に投げ込むときれいになるとかいうEM菌というやつですとか、科学的に立証されていないけど科学的っぽく説明されるものが私たちの生活の中にある。これらを考えていくと、科学そのものを、われわれが科学だと思っ、思わされてしまうような説明というのが、実は科学でも何でもないというような形でいわば化けている、それは科学に化けている妖怪といえるんじゃないかと。そういうことを考えました。

桐生：吉川先生、いかがでしょうか。

吉川：ちょっと議論を続けるとすると、その別の形で現われているとすると、例えば、妖怪といえはキャラクター化していれば愛されるべき存在じゃないですけど、妖怪ではないけど同じ機能を持つものがあるとする、それは、私たちは妖怪だと思っ警戒すべきところを警戒してないわけですよね。その

問題についてはどう考えられますか。飯倉先生、続けて……。

飯倉：私たちはかつて妖怪が担っていた機能を担っているものを、今、妖怪だとは思っていないわけですけれども、それはなぜかという、キャラクター化してしまった妖怪のしぼりである、日本的・土着的なという特徴を持たないので、それらを妖怪とは思わないと考えられます。しかし、妖怪と同じような危険への不安を担っている存在ではある。なので、警戒はしていないわけではなくて、そういう別の不安やリスクへの恐れとして対処している何かはあるのだけど、それをわれわれは妖怪を用いて対処しているとは思っていないというふうに考えることができるんじゃないかと思います。

吉川：ありがとうございます。

桐生：今ちょっと出ましたけど、妖怪そのものは日本そのものというふうに考えてよろしいんでしょうか。

飯倉：それも大きな話になっちゃうんですけどもね。日の丸を背負ってもらうのもちょっと大層だなと思っちゃうんですけども、この日本列島で暮らしてきた人たちがその生活の中で考えつき、伝承してきたものということで、文化の結構深いところと関わっている想像力なんだろうなと思います。

日本は妖怪がものすごく多い文化なんですよ。だって小豆を洗うだけのやつなんか要らないじゃないですか。脛をこするだけとかね。そんな天狗かなにかに全部やらせておけばいいのって話なんですけれどもね。

日本は一つの妖怪が一つの物事を起こす「一芸妖怪多元文化」なんですよ。ほかの文化では、一つの妖怪が何でもやってくれる「多芸妖怪一元文化」っていうものが世界では多いです。日本人はなんでこんなに妖怪が好きなんだろうと思います。

桐生：さて、吉川先生、次……。

吉川：はい。2つ目の質問、続いて先生方のお話を聞きたいです。

ちょっと半分、今お答えいただいたのはあるかなと思うんですけど。

桐生：新しい妖怪が生まれる可能性はあるでしょうか、軽部先生。

軽部：私ですか。新しい妖怪、旧来の形の妖怪。

吉川：例えば、先ほど、ないものの中から人の顔を

見るみたいなことは、それは視覚的に見てしまうものなので、私たちは見続けることをやめることはできないんですよ。そうすると、例えば、新しいものを生み出すものがあるのか。どこかの壁に何かが見える。これは今まで知っているものの何かの写像だみたいなものがあるんですが、よくあると思うんですけど、神様の絵みたいな話です。それが将来生み出されていくんでしょうか。

軽部：どうなんですか。私、そっちのほうは専門じゃないんでわからないんですけど、何か見えたので。例えば、命名するということ言うんであればあるのかもしれないですけど、それをするとか、いや、これは昔いたよと。百鬼なんとかに出てるよとか、逆に突っ込まれるとかいろいろとあると。で、新しい妖怪って、私が言うのは変ですけど、ある程度、人間の生活からすると出尽くしてるんじゃないかな。堀江さんじゃないけど、月に行くとか、地球を一周するとかすると何となく新しい世界が広がってまた何か出てくるかもしれませんし……ということですよ。

吉川：視覚だけに限らないと思いますけど、私は社会心理をやってるので、ちょっとこれも舞台裏の話なんですけれども、この妖怪のシンポジウムのように常にやっぱり気にしているのは、発生形態もそうなんですけれども、社会と共有しているものとして、妖怪的なものを排除するとか、誰かにスビルマをつけるとか、そういうものもあり得るわけですよ。そうすると理解できないものとか、そういうものに対して、人間の形をしている妖怪、つまり、わからないものは妖怪じゃないけど妖怪扱いしてしまうものはこれからあるのかっていうのは、ちょっと関心があるのでお聞きしました。

桐生：以前、吉川先生が何度もご指摘された点ですよ。

吉川：はい。

桐生：例えば、河童そのものにはある意味では被差別の問題もあるというところもありましたし、私の犯罪心理の専門から言うと、必ず何かモンスターみたいな話になっちゃって、そういう妖怪を新たに作るみたいなのもあります。

吉川：先ほどの飯倉先生の話とも関係すると思うんですけど、一芸のときには対処法が(ある)というお話だったと思うんですけど、訳のわからないなん

たらモンスターみたいなのは今テレビでも出てきますよね。そのモンスターに対してどうするの？みたいな話は、実は私たちは新しい形で何か生み出してるんじゃないかというふうに思えるということです。

桐生：おっしゃるとおりだと思います。ちなみに軽部先生、バクスターみたいな研究というのは、たまに学会大会での発表にも出たりしませんか。なんだか訳がわからない現象を測定して、それを説明する研究ですね。以前、私、日本心理学会に参加した時に、随分前ですけど、木星と精神疾患の相関があったという研究があってですね。

吉川：同じものを見てますね、きっと。

桐生：行かれました？

吉川：全部じゃないですけど。その研究、突っ込まれてて……。

桐生：(笑)。……、すみません。吉川先生と盛り上ってしまいました。では、高橋先生、いかがでしょうか。

高橋：そうですね。さっき、飯倉先生のお話の中にもあった、昔は1つだったものが2つに分かれてしまっているところから、キャラクターとしての妖怪は今後生まれる可能性もあると考えていますが、以前のような本来の機能を備えたような妖怪というのは、なかなか難しいと考えています。ただ、その妖怪が本来の機能を果たして仕事をしていた頃も、現在も、人間の心の仕組み自体はほとんど変わっていないので、そういうものを求める心というのは、おそらく今後も消えることはないでしょうし、それに対応した対応策としての新しい形での「代替物としての妖怪」というのは今後も生まれていくと考えています。

桐生：飯倉先生、いかがでしょうか。

飯倉：妖怪の二層構造についてさっき言ってしまったので、またちょっと別のことで述べますと、生活実感や心理とはちょっと離れるのですけれども、新しく妖怪的な存在を生み出しているのがインターネットです。例えば、少し前では2ちゃんねるですとか、今ではツイッターですとか、そういったところで生まれてくる妖怪的な存在があります。例えば、「くねくね」が田舎に出るとか、「ニンゲン」というのが南極にいるんだとか、そういったいわゆるネット発の都市伝説、いわゆるネットロアというのは、ここで

はないどこか遠く、南極だの、秋田の山の中だの、九州の廃トンネルだの、そういうところに不可思議なものがいて、それが目撃されている、それは恐ろしいもので、命を取られたりするものもある、というような話がつくられていく。生活実感の中に妖怪的なものを見つけれなくとも、そういった話をつくり出し、あたかもその目撃者であるとか、その噂を聞いたことがある人であるかのようにネットの中で振る舞うというような「妖怪ごっこ」は人気があるんだなっていうのは感じます。

そういった話に参加するなどして、妖怪がいたような生活というものを、もうどこでもいいからそういった空気を生きてみたいという欲望から生まれる話があるというのは、これは新しい形の作り物ではありますけども、生まれた、生まれる妖怪として考えてみるというのも面白いのかなと思います。

桐生：ありがとうございます。どうでしょう？ 吉川先生、ほかには？

吉川：私はやっぱり今の飯倉先生の話に危機感を感じてしまうんですけども、作り物はそうなんだけれども、それはやっぱり新しい形での差別とかを生み出さないかなというのが、私の関心のあるところでして。わからないものとか、今までは見えないものだったわけですけど、もっと広く見えないとか、聞こえないとか、触れないということをつわからないというふうに広く捉えたとすると、わからないものはどんなものでも妖怪になり得るわけで、最近(細菌?)の兵器の話もそうだと思うんですけども、社会心理学的には非常に興味のあるテーマかなと思ってお聞きしました。

飯倉：敵である他者を鬼などに比定して、当てはめて攻撃するというのは、ずっと行われてきたことでした。ちょっと最近鬼のことで、教育現場で気になる動きがありまして。

今ちょっと注目されているのが、「僕のお父さんは桃太郎というやつに殺されました」って、鬼の子どもが告発するコピーで、それをういた内容の道徳の授業が話題になっているんです。でもそもそも鬼とは、さっき見ていただいたように、対処不可能で目に見えない災いへの不安を擬人化したものなので、それを退治してくれる桃太郎というのは英雄でいいわけだし、そもそも概念である鬼と対話ができるわけがないんですね。インフルエンザと対話して治すこと

ができるんなら鬼との対話も信じますけれども。なので道徳の授業では、「どうしたら鬼と桃太郎が喧嘩をしないで済む世の中にできるでしょうか」ではなくて、「誰かを鬼扱いするなんてとんでもないんだよ」って言わなきゃいけないんだろうと思うんです。そうしないと、鬼と仲良くしろっていうことは相手を鬼だと認めたまま、つまり災いの元凶だと認めたまま付き合えということになってしまう。他者の視点から考えて思いやりを持つことを教育で考えるのはとても大事だと思うし、そのことはいいと思うんですけども、それを鬼と桃太郎でたとえて欲しくなかったなと感じましたね。

桐生：ありがとうございました。

では、時間もちょうどいいところで、これから30分間ほど、フロアの皆様からご質問等を受けながら進めていきたいと思っております。

妖怪につきまして、様々な話題に尽きないものということが感じられたわけなんですけど、皆様いかがでしょうか。せっかくの機会ですので、何でも結構なんですけれども。

そもそも私、妖怪心理学というか、妖怪について、日本心理学会で自主企画シンポジウムを企画考えた頃、立正大学の西田公昭先生と飲んでいる時に、初めて吉川先生にお会いしたわけです。そして、吉川先生だったら間違いなく、妖怪心理学の指定討論お願いできると思って無理矢理お願いしました。その後、ずっとこの関係になってしまいましたね。吉川先生とは、いろいろFacebookとか何かSNSでやり取りしたときに、ちょうど今、鬼の話が出ましたけど、「泣いた赤おに」の話がちょうど……。

吉川：そうです。はい。

桐生：そうですね。あれで盛り上がって、もう吉川先生を、妖怪心理学から絶対離しちゃ駄目だと思って、今日も、ご登壇いただいたわけなんですけれども。

皆様、いかがでしょう？どんなことでも結構です。授業ならば、学生さんなんかには必ず指名しなきゃいけないというのもあって、大体顔を見知った人で、あっ、この子だったら必ずいい質問してくれるという人を探しながら、指名するわけなんですけれども、皆様、いかがでしょう。

はい。先生、よろしく願いいたします。

会場(片岡)：日本能率協会マネジメントセンター

のカタオカと申します。いつも企業人相手の仕事をさせていただいてきたんです。

妖怪についてちょっと今思い出したのは、都市伝説かも知れませんが、私が中学1年生の頃に口裂け女というのが非常に流行って、それが頭をよぎって。水泳部の部活が終わって、夕方の寒いときに友達2人で帰るときに口裂け女が本当にいるんじゃないかとビクビクしてて、今思い出してすごい懐かしい気持ちでしたんですが、そういう妖怪なるものは、きつとちっちゃい子どものうちはそういうものを本当に恐がったり、それが何か成長にプラスかマイナスか影響があるかと思うんですが、そういう妖怪なるものと発達との関係とか、その妖怪なるものをお互いに考えることによって子ども同士のネットワークとかが進むかもしれません。そういう発達的な観点で妖怪というのはどういうふうに扱って考えることができるか、ヒントをいただけたらと思います。お願いします。

桐生：はい。どうでしょう。ご専門の先生がちよつとここには……、発達心理学の人が、いないので、あれですよ。すみませんが、フロアの方で発達心理学がご専門の先生っていらっしゃるいませんか。例えば、未就学児あたりまでの罪悪感を学ぶ時期であるとか、5歳児までに嘘をつくことが出来て、その頃から人間らしくなるなんていう、うろ覚えの知識は私もあるんですけど、さて、妖怪となると、どなたの先生に振ったらよろしいでしょうかね。

吉川：発達心理学は全然……、わからないんですよ。

桐生：そうですね。吉川先生から、こっそりと聞かえたと思いますけど。実は心理学をやっても、私、犯罪心理学ってなっちゃうと、ほぼほかの分野の知識がないような、体たらくな人間でして、犯罪心理学は詳しいんですが、発達心理学だとまたちょっと、なんて言っちゃいましょうかね、違う分野になってしまうんです。先生、ごめんなさい。よろしいですか。

会場(片岡)：いきなり変な質問をして申し訳ありませんでした。(会場から、一人の先生より手が上がる)

桐生：あっ。そちらの先生、ありがとうございます。

会場(石黒)：専門ではありませんが。

桐生：先生、もしよろしかったらお名前を。

会場(石黒)：日本女子大学の石黒と申します。僕も社会心理学というか、社会学であまり発達には関係ないんですけど、いくつか知見はあります。

物事の認識って多分5歳児ぐらいまではほとんどまともにできていないところがありまして、例えば、色とかの認識が大人と結構違うということが知られていたりします。妖怪のことで考えると、すごくキーになりそうなのは、記憶の話で、全体に人間の記憶って後から何かサジェスションを受けると、示唆を受けると、それで割と大人でも歪んでしまうんですけど、この歪み方が子どもの場合、結構大きくて、5歳とか、6歳、小学校に入ったぐらいの子どもたちというのは、非常に突飛な話で……、イギリスでやられた研究ですと、「あなたは女王陛下とお茶を飲んだことがあるのよ」とか、そういう話をされても信じて、それを真の記憶だと思い込むような傾向が結構あります。

あるいは、犬に襲われたとか、何人かの男に襲撃されたとか、そんな記憶をアメリカのほうでは子どもに対して語りかけると信じちゃうという話もあって。ですので、都市伝説なのか、妖怪なのか、どっちなんですかね。口裂け女のような話を聞いたときに、それがすごく何らかの体験と結びつけられたり、いろんなリアリティを持ってしまうのは、子どものほうが強いというのは、おそらく間違いなくあると思います。僕の質問をついでにしていいいですか。

桐生：はい。どうぞ。

会場(石黒)：妖怪の1個の機能というのは、何か出来事が起きたときのHowやWhyを社会的に合意していく、そういう仕組みだという考え方があっていいんでしょうかね。1つです。全部じゃないと思うんですけど。

そうだとすると、かつて柳田とかが、あるいは水木が引っ張り出す前は妖怪ってローカルだったわけですよ。そうすると、何で妖怪みたいなものがあやって強くあり得たかという、ローカルなところですごく似たような生活習慣を持って、似たようなライフサイクルを持っている人たちが集まって密にコミュニケートしていた村みたいな社会があったから、同じような不思議体験をすることが結構あるし、その中で妖怪というものが存在し得たんじゃないかなと思うんですね。

で、今みたいに何で科学的知識が妖怪を駆逐する

かという、その前に多分人がみんなバラバラになっちゃって、ライフサイクル、ライフスタイルが多様化するとみんなが同じ場所の同じような経験、同じような不思議経験をすることがなくなっちゃうからだと思うんですね。違うような場所でほっぺを触られたら妖怪の仕方が多分いろいろになってしまって、そこに固有のラベルが貼り付けられた妖怪とかってどうしたって生まれにくくなると思うんです。

じゃあ、われわれが共通して持てるような知識って何かって言うと、学校で教える知識になるので、それが科学であるということになるんじゃないかと思います。誰だっけ？飯倉先生がおっしゃったと思うんですけど、怪しい科学がいっぱいあって、そういう意味では多分、……。例えば、原則夏が暑いのに温暖化は関係ないんですけど、われわれはすぐ温暖化って言ってしまう。温暖化って多分妖怪がいて、われわれの夏を暑くしているような認識を持ってるっていうのは、妖怪とあまり変わらないと思うんですけど、そういうものになっていってしまう。

その中でどうして子どもたちがすごく妖怪ないし都市伝説に対して親和的かという、多分あの子どもたちっていうのは、まだ残された、みんなが同じ生活をして、で、非常に密なコミュニケーションを取れるコミュニティの最後の場所なんじゃないかなという気がします。で、それとその子どもたちの幼さみたいなものが組み合わせられると、そこに妖怪なり、都市伝説なりがすごく生まれてくる。だから大体、学校か通学路にいますよね。子どもたちの大好きな妖怪が北極にいることってあまりなくて、人間みたくに、なんじゃないかなというような気がいたします。

社会的なものと発達のなものと、二重の……、二重なのかな、もっといろいろあると思うんですけど、いろんな組み合わせの中で子どもたちの中にまだ妖怪的なものが生まれるんじゃないかなと。一方でだから大人になると消えちゃうんですよね、生活がバラバラになっていくから。じゃないかなという気がちょっと思いました。すみません。長くなりました。

桐生：石黒先生、どうもありがとうございます。飯倉先生、お願いしてよろしいですか。

飯倉：今おっしゃっていただいた、そのとおりだと思います。以前「学校の怪談」が大人気になりました

て、1990年に児童書が出まして、そこからテレビドラマや映画にもなって、今はもう児童書で一つのジャンルにもなっています。

何でこれがそんなに受けたかという、学校経験というのは今の私たちが欠かさず備えている共通の経験なんですね。教育のことって指導要領がちゃんと定まっていますので、地域によって、あれがない、これがないというのはないんですね、ほとんど。「俺、北海道出身だから小学校のとき園工やらなかったよ」なんていうことはないわけで、みんなが同じライフサイクルで同じような経験をするっていうことを通過してきている。だから共通の知識や認識、生活のパターンが記憶に残されているので、話が了解されやすい。さらに学校というコミュニティは本当に村落共同体社会をそのまま子どもたちに当てはめているような、均質な集団なんです。こんなことは、みなさんには釈迦に説法だと思うんですけども。

かつての共同体においては年齢差があるんですけども、学校のクラス共同体は年齢差がない集団なので、さらに受け取り方が近い。だから、口裂け女を見たとか、そういうパニックが伝染するというのは、学校現場で低学年なんかは時々起こしちゃうんです、そういったお化けパニック的なものを。というのを見てると、子どもたちの間でそれがあるのは村社会に近いからだというのは、本当にそのとおりだと思います。

桐生：飯倉先生、ありがとうございます。石黒先生、良い質問でありがとうございます。

さて、いかがでしょう。ご質問、ご意見、何でも結構なんですが。ぜひとも、いかがでしょうか。はい。先生、よろしくお願いします。

会場（木村）：私、MOA健康科学センターの木村と申します。本日は、とても興味深いシンポジウムに出席させていただいてありがとうございます。

東洋大学の創立者の井上先生という方が妖怪の研究をされてたというのは、今日初めて知りました。それで、こういうシンポジウムが今日あったのかなというふうにも思っているんですが、ここで高橋先生たちが「妖怪と心理学」を研究されているのが井上先生の影響を受けられてるのか、もしくは井上先生がおられるから東洋大学に入って研究されているのか、たまたまなのか、ちょっとわからないんですが、この井上先生が先行研究として、その妖怪というも

のをどのように、どこまで心理学的に研究されていたのかというのが、話の中にちょこちょこ出てくるんですが、全体がよくわからないので、もし差し支えないというか、わかる範囲内でいいんですが、ちょっとそういう説明をいただけるとありがたいと思うんですね。

先ほど心理学は、今、分化されてて、発達だ、社会だ、認知だとか、いろいろあって、専門がかなり細かくなっていますが、おそらく当時は心理学、そんなに分化されてなくて、もう心理学という一つの学問があるのかどうかもわからないというか、哲学の中の一分野だったのかもしれないと思うんですが、そういう中で井上先生が「妖怪と心理学」というのをどのような研究と言いますか、どのような論文を出されていたのかなというので知りたいと思ひまして、お願いいたします。

桐生：円了先生、これはどうしよう。高橋さん、答えられます？井上円了先生のことです。高橋先生、お願いいたします。

高橋：ご質問ありがとうございます。一言で申し上げますと、井上円了は当時の科学では説明できなかったことをすべてを「妖怪」と名付けて、その中でもそれぞれの細かい、例えば、占いとか、天気の話、そういったものすべて含めて妖怪と呼んでいました。ですので、今日のお話の中に出てきた妖怪とは少しイメージが異なるかもしれませんが、そのようにして、当時の人たちがあまりに迷信にとらわれている。ただ、西洋と比べて、そういうところが日本人は足りないところなのではないかということから、そういうものを信じるのではなくて、きちんと合理的に物事を考えなさいという姿勢で研究に臨まれたというのが井上円了先生の研究だと理解しています。

桐生：若干補足をいたしますと、心理学そのものは日本に入ってきたときに、西周(にしあまね)という哲学者ですか、あの人がサイコロジを心理学と付けた時点で、既に実証主義的な実験ベースの心理学になっています。ですから、哲学や文学といったイメージの心理学より、実証性を重んじる学問として東京帝国大学にて研究がなされ、それ以降に東大で学んだ井上円了先生なので、その意味ではきちんとしたサイエンスに基づく学問になっていた、というのが一つですね。

ですから井上円了先生が、「妖怪というものを簡単

に信じないで、もっと科学的に現象を見ていきましょう」という、なにやら近代国家を目指す日本としてはピッチシだった、ということだと思います。

続きまして……はい。では、先生、よろしくお願いします。

会場(中井)：大阪大学の中井と申します。私自身は全然妖怪について研究しているわけでもないですし、お化けと妖怪と幽霊と、そのあたりの違いはよくわからないんですけども。

高橋さんのご発表の中で、クレジットカードのトラブルで、一世一代のプロポーズが失敗したりとか、あるいは、水辺で子どもが水難事故に遭ったときに、その原因、どうしてその不幸が自分に起きるんだろうってというような、そういうことが起きた場合の心の折り合いのつけ方というか、その何かしら心を正常に保つ、そういう対処法として妖怪というものの存在を利用する可能性があるんじゃないかっていうようなことがあったんですけども、じゃあ、妖怪という概念であったりというのを活かす方法として、私が思ったのは、そのおっしゃられたネガティブな事象があったときの適用的な心のメンタルヘルスの持ち方とか、そういうところにちょっと妖怪を使うと適用的なのかどうかというのはいまいちピンと来なかったんですけども、もしあるのであればそういうところなのかなというのと。

あともう一つは、例えば、子ども自体に何か危険なことをさせないってときの脅しのツールと言えますか、妖怪がいるよ。こういう悪さすると、あるいは危ないことをすると連れて行かれるとか、何かしら、そういうことが起きるといような、そんなツールとして使われたりということがあったりするのかなと思うんですけど。でも、そこにあえて妖怪というのを使う意味というのはどんなふうにあるのかなというのを、これは別に高橋先生以外にもお答えいただけたらと思うんですけども、そのあたり、ちょっと教えていただければと。

桐生：妖怪の持つ様々な側面ですよ。高橋さん、どうでしょう。

高橋：ご質問、ありがとうございます。そうですね。おっしゃるとおり、妖怪にその悪いことと言いますか、ネガティブなことを背負ってもらって心の折り合いをつけるというので、現代で活用できるとすれば、例えば、ここにお菓子が置いてあって、お菓子

がなくなった。現代では多分、誰が持って行ったのかと、ほぼ100%に近い方が思うと思うんですが、近代以前ではそれは例えばオヤツサライという妖怪が持って行ったんだということにして、その場を収めていたということがあると思います。

ただ、現代、今これだけ科学でいろいろなことが明確になっていく中で、その曖昧であることを良しとしない、という風潮が強くなると思います。そういうものが私たちの心を少し生きづらくしているのではないかという仮説を持っているので、そういう深く追及しなくても済むようなことはそのままにして、ちょっと置いておくというような心の持ちようが生活を少し豊かにしていくのではないかと考えています。

あと、子どもに対する教訓的な意味合いということなんですけれども、私は研究内で妖怪の持つ、人や社会に対する作用を社会的機能と名付けて研究を進めています。まだその項目は定まっていないのですが、教訓、畏怖、そのようなものが含まれています。

特に子どもに対しては、現在の例えば防犯教育などでもそうなんですけれども、舞台上に黒ずくめのマスクをした、サングラスをした犯人らしき人が出てきて「こういう人は危ないからついていってはけません。」、でも、実際の場面で黒ずくめでサングラスをしてマスクをした人が声をかけてくるってことはほとんどないですよ。いかにも普通の好青年っぽいような……、男性に限ってしまって申し訳ないんですけど、好青年のような顔をした人が近づいてきて、「お菓子をあげるよ」って言って連れて行ったりとか、そういうことがあるわけで、それを昔は違う形で、子どもにもっとわかりやすく説明という意味で妖怪のような形を与えていたのではないかと考えています。

この辺のことは、飯倉先生のほうがお詳しいと思うので……。

桐生：飯倉先生、お願いします。

飯倉：子どもへの教訓というか、警告として妖怪を使っていくというのは、現代でもやっている事例がけっこう多いですね。学生に授業でコメントペーパーを書かせた中に、「私が小さい頃、ウーカンカンが来るからもう寝なさいって言って、それが恐くて寝ました」って、19、20歳ぐらいの子が書いてきました。「本当にウーカンカンは来るのでとても恐かつ

たんですが、後年になって、それは地元の消防団の夜回りだということがわかりました」とか、そういうふうなことを書いていたんですけど。

私もこれで脅されたことがありましてね、母方の本家筋の家の裏手に井戸があったんです。その頃、使っていないから閉鎖してたんですが、その井戸に子どもを近づかせないために、「あの井戸には化け猫の幽霊が出るから近づくな」と言われたんですね。化け猫だけでも恐いのさらに幽霊なんですね。で、まあ、いとこたちと一緒に近づかなかったんですけども、このことを考えると2つほど、こうした教訓の使いやすさがあるかなと。

1つは、対処不能であるということ。「おまわりさんが来て怒られるよ」と言われても「何もしてないもん」と言えるんですけど、「ウーカンカンが来るよ」、こういう正体不明、意味不明のものに來られてしまったらどうしようもないと思うだろうこと。

もう1つは、万能であるということ。井戸にお化けが出るから近づくなというのは、お化けの恐さで抑止しているわけなんですけど、本来は井戸の周りで遊んでいると誤って落下し、そして溺れ死ぬ可能性があるからっていうことを納得させなきゃいけない。井戸の近くに行くとおまわりさんが来て怒られるよとか言っても本当には来ないことはそのうちわかっちゃいますので、有効ではない。ただ、化け猫の幽霊はいつどこから出てくるかわからないので、子どもはその恐さで本当に近づくの……。私たちは遠巻きに井戸は見えていましたけども、そのうち何も起きないから飽きるの、でも近づくなと言われているので別の遊びに行ってしまう。そういう使いやすさというもあるのかなと思いますね、伝承の中では。

桐生：いかがでしょう？ よろしいですか。

会場（中井）：ありがとうございます。

桐生：ちなみにいわゆる大人の場合もあったんでしょうかね、例えば、江戸時代などで……。

河童の話ですが、お子さんが川に流されるとか、災害になったときに河童の責任にしとけば、何となく親御さんたちの納得がいく、癒やされていたわけです。ところが今は、とにかく原因を明確にし、例えば行政の責任だというふうに追及しないと、なかなか落としどころが見つからない、といったことがあったりしたように思うのですけれど……。

飯倉：うやむやにするという効果はあったと思い

ますね。誰がいなくなってしまうても「天狗にさらわれたんじゃないか。あいつはよく山に行っていたから」と言えればみんなの罪悪感とか、もっとあてできたかもしれないというような後悔とかがうやむやになる。すごい事例だと、1人、女の子が乱暴されて殺されていたんだけどそれを狐の仕業にしてごまかしちゃっているとしか思えない事例なんかもあるんですよね。原因を追及……、これ以上できなくなったときの逃げ場ということでは使われていたかなというのがありますね。

桐生：ありがとうございます。

さて、あと7分程度なんですけど、もうお一方。先生。石黒さん、ごめんなさい。ちょっと後ろの先生。じゃあ、お願いいたします。

会場（廣島）：お世話になります。この3月まで航空自衛隊の研究管理官をしておりました廣島と申します。大体もう議論の論調というのが非常にはっきりしてきたと思うんですけれども、一つ、妖怪の中には明白な実態があった例もあるよというお話をさせていただきたいと思います。

これは2つの領域から指摘されていることでして、まさにこのポスターにありますひとつ目小僧ですね。1つは、医学、毒理学の領域からサイクロピア（単眼症）という現象が指摘されております。これは妊娠14日の早い段階でバイケイソウとか、スイトビーのアルカロイド毒素が入りますと文字通りひとつ目の胎児、もちろん鼻の形成も非常に不全になりますのですぐ死んでしまうわけなんですけれども、こういう子どもが生まれてくる。ですの、欧米では牛とか、羊とか、あれが結構この手の毒草を食べましてサイクロピアが生まれてくるという事例が多いようです。

わが国では、バイケイソウは山草として食べられるウルイに非常に似ているものですから、昔はどうやらこれで結構ひとつ目小僧が文字通り生まれたというふうに指摘されております。

もう一つは、山陰のほうで特に盛んだった「たたら」ですけれども、火を調整するために穴が炉に開いているわけなんですけど、それを見ていると爆燃が起きることがあるわけなんですね。そうしますと目をやられてしまう。文字通りひとつ目になってしまうということで、これは、作家のノマヒロシ（野間宏）さんとか、桃山学院のオキウラカズミツ（沖浦和光）

先生あたりがいわゆる差別論と絡めまして、山陰のほうではひとつ目小僧伝説が非常に多いよというような話をしておられるようです。というところをちょっと指摘させていただきたいと思います。

それともう一つ、先ほど軽部先生のほうから次高という妖怪を伺いまして面白いと思ったんですけども、例えば、「アリス・イン・ワンダーランド」の中にはアリス自身が大きくなったり、小さくなったりというような話がありますね。あれは、これはいわゆる離人感、そのものが一つのタイプとしてあるなというふうに感じた次第でございます。失礼いたしました。

桐生：どうもありがとうございました。まさに先ほど吉川先生がおっしゃられたように、ある意味、人間が持つ差別、被差別の関係性を具現化するのも妖怪なんだ、ということなのでしょうかね。ですから妖怪の持つ良き面、悪き面、そういったものは必ずあることを自覚しておかなくてはいけないのだと思います。ありがとうございました。

それでは、先ほど手を挙げていた石黒先生、時間がまだありますけど、いかがですか。

会場(石黒)：何で日本の妖怪は一個のことしかないのかっていうのを、ちょっと教えていただけると。すごく気になるんですけど。

桐生：飯倉先生。

飯倉：わかりました。そうですね。妖怪が一個のことしかないというか、一つの現象にその原因を求めて名付けてしまうことによって妖怪がつくられていくというのは、特に江戸時代以降起きてきた事柄だと思います。こういう不思議なことがある。その一個一個に名付けをして、それを各々一つの存在であるかのように認識してしまう。それによって妖怪がどんどん増えていって、妖怪がああスライドで見ていただいたように娯楽化しますと、そうやって名付

けの面白さでどんどん妖怪を創作で増やしていってしまう。そういったことがあって、一つのことしかない妖怪が次々と増えていってしまうということがあったんです。それにはおそらく日本語が妖怪をつくるのに適した言語だったというのが関係しているんじゃないかと考えています。

名詞と形容詞などを組み合わせると妖怪っぽくなるんですね。「泣き赤子」とか、これ普通の言葉なんですけども、「笑い地蔵」とか、こうやっただけでも妖怪っぽくなってしまいますので、そういう存在をつくりやすいというのがあったんじゃないかと思います。

それから先ほど廣島先生がおっしゃっていた、ひとつ目と製鉄の関係というのは、結構実証とまではいかないんですけども、関係は深いぞということは研究がいろいろされていて、谷川健一さんなんか「目ひとつの神」っていうことで、例えば、紀伊半島の一本踏鞴(いっぽんだたら)とか、目が一つ、足が一本の妖怪的な神的存在というのが製鉄とどうも関わりがあるらしいということが指摘されていますので、その一例を挙げていただいてありがとうございます。

桐生：ありがとうございました。日本語、なるほど、そうなんですね。例えば「へび女」。私は忘れもしません。楳図かずおの「へび女」、きれいなお母さんが追っかけてきて、後ろを振り向いたら、ペロペロの舌のへびになっていて。あのマンガを見た後、間違いなく女性恐怖症になってですね(笑)。

では、ちょうど時間となりました。日本応用心理学会公開シンポジウム2019「妖怪と心理学 私たちが得たもの 失ったもの」をこれで終了したいと思います。皆様、どうもありがとうございました。

(拍手)